



横内理事長の就任挨拶



NHK 大学セミナー



子ども公開講座



遊学奨励金交付式

特集 理事長交代にあたって 2

大谷哲夫前理事長
横内正明新理事長

特集 さよなら「文大」 4

初等教育学科	麻場一徳	教授
社会学科	横田 力	教授
社会学科	渡辺豊博	教授
情報センター	杉本光司	教授
英文学科	松土 清	特任教授
情報センター	黒崎茂樹	特任准教授

おくることば 10

初等教育学科	平野耕一	准教授
国文学科	野口哲也	准教授
英文学科	今井 隆	教授
社会学科	菊池信輝	准教授
比較文化学科	水野光朗	准教授
大学院	中地 幸	教授

旅立つことば 14

初等教育学科	坪野裕貴	
国文学科	小林千絵	
英文学科	今野翔介	
社会学科	岸本晴朗／上西きり子	
比較文化学科	梶原彩加	
文学専攻科	初鹿貴大	
大学院	国文学専攻	伊藤貴彦
	地域社会研究専攻	渡邊里穂
	英語英米文学専攻	園部敬祐
	比較文化専攻	菊池有紗
	臨床教育実践学専攻	崎田香穂

卒業論文・研究論文・修士論文一覧 22

初等教育学科・国文学科・英文学科
社会学科（現代社会専攻／環境・コミュニティ創造専攻）
比較文化学科・文学専攻科・大学院文学研究科

講演会だより 37

国文学科（国語国文学会秋季講演会）
英文学科（英文学科・英文学会共催後期講演会）
比較文化学科（比較文化学会主催講演会）
ジェンダー研究プログラム（ジェンダー研究プログラム主催講演会）

文大だより 41

卒業演奏会を終えて
卒業制作展を終えて
NHK 大学セミナー
第11回地域交流研究フォーラム
合唱団第50回記念定期演奏会
遊学奨励金交付式
子ども公開講座
本 ぶんだい堂
編集後記…日向良和 46

退任にあたって

すばらしき都留文科大学の更なる発展を祈念する

前理事長 大谷哲夫



昨年は、都留文科大学 60 周年の記念式典を盛大に祝うことができました。これもひとえに市当局・教職員・同窓生の皆様の母校愛あればこそと、心より御礼申し上げます。

私は、3 年前の理事長就任にあたり、私に課せられた使命は、「都留文科大学創立 60 周年を期してどう展開し発展していくか」その基礎作りにあると痛感いたしておりました。したがって私は、昨年、創立 60 周年を迎えた時に、これまでの本学の歴史に鑑み、諸先輩方の輝かしい業績を称えとともに、グローバル化などという言葉を超えて進化する世界情勢の中で、この 60 周年を、都留文科大学発展のための改革元年と位置づけ、本学をさらに飛躍させなければならないと考え、大意次のように述べさせていただきました。

都留市は、本学の草創にあたり、市を「東京に接近する絶好の大学都市」と位置づけ、初代学長は「全国の文化と教育に貢献することは一大快事である」と述べたと伝えられます。また、都留市は、近年の高度経済成長期においても、自らの主たる役割を「教育」に確実に見定めて、次世代の教育者の育成に力を注ぎました。大学自体も教職員一丸となって、「菁莪育才」の精神を遺憾なく発揮し、その結果、本学は全国から優秀な学生を集め、教育者を育てる場を確立し、有為なる卒業生は教育現場ばかりではなく、社会のさまざまな場で活躍しています。今では、本学が都留市の大きな財産であり、地方都市に存在する

大学の雄として希有な存在であることは周知の事実です。

しかし、現代日本の少子化の問題は極めて深刻で、地方の大学では、定員割れどころではなく、既に閉校に追い込まれている大学も出現し、大学淘汰の現象が顕著になってきている現実があります。所謂 18 年問題が現実逼迫している現状に鑑みると、本学といえども、時代を先取りした対策を怠るならばどのような事態を招くか予想はできません。今後、都留文科大学は、「教育研究」では、時代に即応した新カリキュラムの実施に伴う教育環境の整備は勿論、学部学科の再編、進展中の「国際バカロレア」などの充実、各種センターの設置とそれらを集約する建物の建築。「学生支援」では、学生へ奨学金の充実は勿論、国際交流をより実践的にするための独自の奨学金の導入とその展開。「地域貢献」では、都留市の CCRC 構想と緊密な連携をして「大学 COC = 地（知）を生かす拠点 = 推進機構」を充実させ、大学と地域が融合したところに発生する知的財産を友好的に活用する場を構築し総合的な学園都市を目指さなければなりません。

本学は、本年 61 年目を期して、全国の文化と教育に貢献するばかりではなく、地方大学の雄として、先人に学び、世界へ情報発信する、今まで以上に存在感のある大学へと発展しなければなりません。そのためには、市との密接な関係は勿論、本学の教職員の確たる連携がなければなりません。

私自身は、万やむを得ない事情により、後任の理事長も任命されますので、本年度の一月末をもって退官することになりましたことをご報告させて戴きます。そして、在任中の教職員の皆様のご支援ご協力を心より御礼申し上げます。理事長を退任するにあたり、すばらしいご縁をいただいたすばらしき都留文科大学の今後のますますの発展を心より祈念いたします。

就任にあたって

新理事長 横内正明



2月1日付で理事長に就任した横内正明です。

出身地は、ノーベル賞受賞者大村智先生の生地として有名になった山梨県韮崎市です。韮崎高校卒業後、大学を経て、国家公務員になり建設省に勤務しておりましたが、平成5年、はからずも衆議院議員になり、3期10年、政治の修羅場に身を置きました。

その後、平成19年、山梨県知事に転じ、2期8年務め、平成27年2月に引退しました。知事の任期中は、「暮らしやすさ日本一」の山梨づくりを目標として、退任直前の平成26年には、東京からの移住希望地として山梨が人気ナンバーワンになり、健康寿命が男女とも山梨が全国一になるなど、暮らしやすい山梨づくりに一定の成果があったものと思っています。

昨年12月、堀内都留市長から、都留文大理事長に、というご要請がありました。東北福祉大学学長の萩野浩基氏が逝去され、後任に急ぎよ、大谷哲夫理事長が行かれるため、そのあとを引き受けてもらいたいとのこと、萩野さんは私の衆議院時代の親友でしたので、これも一つのめぐりあわせかと判断し、お引き受けしたところです。

私は教育については専門家ではなく、年齢も70歳を過ぎていますので、はたして本学のためにどの程度の仕事ができるかは自信がありませんが、「加齢と登山は上に登るほど、身体は動かなくなるが視界は広がる」と言われるように、私の長年の経験に基づく識見

や人脈が本学のお役に立つように努力する所存です。

さて、都留文科大学は、地方小都市にありながらも、全国から3,000人の学生を集め、学生の資質も高く、とくに教員養成の分野では全国ブランドの大学として有能な教員を全国に送り出してきました。60年の歴史を経てこのように立派な大学に成長したのも、常に時代の変化に対応すべく前向きにチャレンジ精神をもって改革を進めてきた賜物であり、誇りとすべきことであります。

しかし、これからの10年、20年、大学をめぐる環境は極めて厳しいものがあります。とくに18歳人口が2018年から急減し、単純に計算すれば15年後には全国800近くある大学のうち100大学以上が消滅することになります。まさに大学淘汰の時代、大学生生き残り競争の時代が到来するのです。

本学がこの競争の中で生き残り、さらに発展していくためには、都留市の協力を得ながら、大学関係者が一致協力して大学運営全般にわたる改革改善を進め、学生と社会にとってより魅力のある大学にしていかなければなりません。国際教育学科をはじめ、グローバル化等に対応した学科再編が必要ですし、県合同庁舎の取得を急ぐとともに、安全快適で美しいキャンパス環境の整備も必要です。

こうした課題に誠心誠意取り組んでまいりますので、よろしくお願いいたします。

経歴

昭和35年3月	山梨県立韮崎高等学校卒業
昭和39年3月	東京大学法学部卒業
昭和39年4月	建設省入省
平成5年7月	衆議院議員就任(3期10年)
平成13年5月	法務副大臣就任
平成19年2月	山梨県知事就任(2期8年)
平成28年2月	都留文科大学理事長就任

さよなら文大

退職教員からの言葉

都留と陸上競技

初等教育学科教授 麻場一徳



後ろ髪を引かれる思いも多々ありますが、今回、大きな決断をさせていただきました。

26歳で本学に赴任し、あっという間に過ぎた29年でした。正直なところ、これほど長くお世話になるとは思っていませんでしたが、本学関係者の方々、地域の方々に本当に良くしていただき、ここまで勤められました。

赴任当初、学生と接して、真面目で素直な印象を受けると同時に、不本意なまま在学している者が多いと感じました。ドラマの台詞ではありませんが、「この大学には誇りが必要だ」と若輩ながら感じたものでした。

私にできることといえば、やはり陸上競技です。やるからには、それなりに競技を目指し、大学の名を背負えるようなチームを作ろうと、当時の陸上競技部員たちとスタートさせたことを思い出します。同好会的集団からいきなり競技志向へと転換したため、当時は部員数がどんどん減っていきました。

そのうちに、芸術体育系の推薦入試制度が出来、やまびこ競技場が出来、さらにはAO（体育系）入試が出来るなど、環境が整うとともに、多くの方々に支援をいただきながら、徐々にレベルの高い競

技会で成果をあげられるようになってきました。特に、女子部員の進境には目覚ましいものがあり、日本選手権、日本インカレなどの全国大会で活躍する者も出てくるようになりました。全国大会の入賞者は、延べにすると50名以上になるかと思います。

そして、日本代表選手として、これまでに4名が国際大会に出場しております。中でも2012年ロンドンオリンピックに佐野夢加が出場できたことは、私としては、奇跡的なことだと認識しています。失礼な言い方かも知れませんが、本学では二度と無いことだと思っています。それだけに、佐野は本学にとって宝であり、大切にしていただけなら有り難く思います。

学生に指導し続けてきたことは、「良いチームづくりとそれに貢献する取り組み」です。つまり、いわゆるスターがいるチームではありませんので、集団としてのレベルを上げる取り組みの中で個を伸ばそうとするものでした。おかげさまで、「リレーだけは負

けない」という伝統がチームに根付くことができました。そして、（女子の）オレンジ色のユニフォームは、日本の陸上競技界において確実に市民権を得ることができました。

2020年東京オリンピックが決定してから、我が国の体育・スポーツを取り巻く状況が大きく変化してきています。今回の転任もその延長線上にあるものと思っています。能力的にも、性格的にも、私自身、勝った負けたの世界に向いているのか疑問も持っておりますが、もうしばらくは、勝負の世界に身を置いて頑張ってみようと思います。

都留文科大学への愛着は、人一倍持っているつもりです。本学が今後、益々発展していくことを心より祈っております。本当にお世話になりました。ありがとうございました。



2008年8月関東甲信越大学体育大会女子総合初優勝

さよなら文大

退職教員からの言葉

現代史と日本国憲法にとり「2015 年」の意味とは何か

—point of no return としないためにも—

社会学科教授 横田 力



もう間もなく文大に着任して以来 19 年が経とうとしている。この 19 年間は正に光陰矢の如しであり、束の間の感である。

否、それだけではない。思えばこれまでの私の人生経路そのものがその時々歴史に向き合いながら生きてきたこともあり、時間を停止した間の中に置いて見るという対自的な関係にはなかったといえよう。既に私の青春がスタートした '60 年代後半は、高校までを含む全国的な学園紛争の時代の幕開けにあり、'66 年の早大学費値上げ闘争に始まり、日大、東大闘争へと全国へ若者の声が大きくなうねりとなって波及していく時代にあたっていた。

そしてそれらを取り巻く社会と政治の動きは、'67 年のアジア情勢と沖縄返還をめぐる日米共同声明を受けた '69 年 11 月の佐藤・ニクソン共同声明による沖縄返還合意と韓国、台湾条項さらにはベトナム条項による有事の際の全国基地の出撃基地化の容認と事前協議制の運用における米国への「前向きな配慮」への言明といった具合に、岸内閣によって改訂⇒構造転換された日米安保体制の機能的展開をどこまでも強力に支えることが国是とされる時代を迎え

ようとしていた。

そのような中、日本は '68 年には当時の西ドイツを抜いて GNP で世界第 2 位となり名目で年 17 ~ 8% の経済成長を続ける経済大国としての枠組みを確立していく。そして先進国の中でも独自の意味をもつ日本の平和主義と平和意識は、無謀で凄惨を極めた戦争体験をふまえたことで、軍事的なるものを強く嫌忌（忌避）するものから、次第に豊かさを実現するための手段的価値へと変化していくのである。

ここでは同じ憲法 9 条を支える国民意識にもいくつかの分枝が生じていることをみることができる。そのことは、'71 年以来の米中国交正常化へ向けての動きとそれを受けた '72 年 9 月の日中国交回復の際の中国首相周恩来による「日米安保を敵視せず」の声明後の世論状況にはっきりと現れることになる。即ち、この時を境に日米安保賛成派と反対派の割合がクロスし、その比率が逆転し、自衛隊への支持率の増大とあわせて日本国民は 9 条の枠組の中で軍事的なるものを容認していくのである。

従って、このような中で実現した沖縄返還が如何に不十分かつ不完全でその中に今日

まで続く構造的差別を含んだものとなったことは必然であった。ただし、ここで留意すべきことはこの構造は修正を受けたとはいえ、あくまで憲法 9 条の枠組を維持した上でのことであり、その理念を、対外戦争はあくまで拒否し、自己の豊かさと幸福を守る手段的価値として認めることを前提としていたということである。

話はここで一気に 2015 年に飛ぶ。もう他言は要すまい。この年の現代史における画期的な意味は正にこの点に、即ち右の構造と前提を「政府の行為によって」破壊したところにある。しかしそれに異を唱え、右の構造と前提を立憲主義という立場から更に純化し発展させようとする声が '70 年代とは違った質をもって台頭しつつある。専任職を辞するという意味ではひとつの区切りの年にあたり、この息吹に今後を託し、またそれを共に担っていきたいと心を新たにしているところである。



沖縄普天間基地

さよなら文大

退職教員からの言葉

人間力と実践力を身につけた
「現場人」を育成

社会学科教授 渡辺豊博



2008年4月1日に都留文科大学に赴任してから、早いもので8年の歳月が経過しました。多くの戸惑いと試行錯誤の繰り返しが続く日々でしたが、何とか無事に退職を迎えることができました。これもひとえに、現在まで、ご支援・ご助言をいただいた多くの方々のお蔭だと感謝しております。

私は、本学で勤務する前は、静岡県庁に35年間おり、農業基盤整備の計画実施やNPO支援、静岡空港の生活生業対策、静岡県総合計画の策定などを現場最前線で担当してきました。最も苦勞・腐心したのは、多種多様な考え方を持つ県民や企業、専門家、各行政間の「合意形成」の構築でした。

実社会では、とにかく対立しがちな利害者同士を結び付け、パートナーシップの関係に導く仕事でしたが、多くの成果を残してきました。成功の秘訣は、戦略的なアプローチや強い人間力、臨機応変な行動力と創造的な発想力など、従来の役所の画一的な規範を打破していく強い意思と挑戦力が求められました。

まさに、本学に在職した8年間で、私が学生に熱き思いで伝えてきたポイントは、「現場には社会の真理がある」「現

場には人としての生き方を学ぶ多様な知恵がある」でした。確かに、大学は、人としての専門的な知識や高度な教養を学ぶ「学問の府」としての役割があります。しかし、複雑多岐なしがらみや利害が交錯する現実社会を、自分らしく生き抜いていくためには、現場での的確な判断力や忍耐力、経験知・専門知に基づいた迅速な行動力や実践力が求められます。

私の授業では、私が主宰している「グラウンドワーク三島」が実施している「源兵衛川での草刈りや堆積土の排除、松毛川での河畔林の竹林伐採や植林活動、三島ソバの種まきなどの農業体験、新たなまちづくり計画に関わる市民とのワークショップへの参加、地域住民との交流」などの現場体験を重視してきました。

学生はこれらの体験を通して、現場での効率的な作業の段取りや住民との人間的な付き合い方、多様なNPOの現実的な役割などを学びます。また、現場での活動を通して、自分のふるさとへの「愛郷心」

や問題意識、関心なども芽生え、地元での就職を考える切っ掛けづくりにもなっています。

その他にも、就職力・就業力アップ講座の開講による公務員の人材育成や面接指導、英国や韓国に延120人もの学生が参加した海外研修の企画、全国各地の高校での模擬講義の開講、多様な団体に招聘されての富士山学の講演、アメリカ・ニュージーランド・屋久島・白神山地など世界遺産地区の調査、東日本大震災やネパール大地震への支援活動、都留市内湧水地でのパイカモの里・ホテルの里づくりなど、都留文科大学での思い出は尽きません。

今後、本学の学生が地元や日本、世界を先導していく人材に成長してくれることを願っています。本当に、お世話になり、ありがとうございました。



ネパール大地震被災地にバイオトイレを贈呈

さよなら文大

退職教員からの言葉

10年+19年の大学生活

情報センター教授 杉本光司



タイトルに示した数字は、私が本学事務職員として過ごした10年と、教員として過ごした19年を表しています。私は、1975年10月に都留市役所に事務職員として採用され、企画課情報管理係配属となり11年6カ月を経た、1987年4月に大学事務局に異動となりました。そこでの主業務は、それまで外部委託処理していた大学入試業務の学内処理システムの構築でした。複雑化した多様な入学試験業務の分析や大学入試センターとの打ち合わせ等を行い、全工程のシステム図を作成後、全てのプログラムを作成し、本番に臨んだ、あの緊張感は今でも忘れることが出来ない思い出です。その後、学内でのパソコンを利用した新たな情報教育教室の設置計画もあり、1993年7月には全国の国公私立大学の文系282学部「文系学部における情報教育とその周辺設備に関する調査」

を目的とするアンケートを実施しました。その調査結果は、1994年2月の本学研究紀要40集に研究論文として発表させて頂くと同時に学内の情報教育部会を通して、情報教育教室の新規整備事業や新しい情報教育カリキュラム作成に対しての資料として提案させて頂きました。この1編の論文執筆・発表が機となり、他大学の先生方から研究会での発表や学会加入のお誘いを受けることにより日常業務以外の時間における研究活動が始まりました。

そして、1994年4月には、文系大学としては早い時期に、本学に情報センターが設置されることになり、現在の2402教室のネットワーク化、学内LAN構築、そして、いち早く、『インターネット』の教育利用の可能性を掲げ、東京大学を基点とした「TRAIN（東京学術インターネット）」に加入し、

未だ、始まったばかりのインターネットに関わる技術習得に夢中になった時間はとても強烈な思い出です。この時期に関わった他の大学や企業の若い研究者たちからは大いに学ぶことができ、現在も良き相談者として相変わらず私を支えてくれています。

そんな中、本学での情報担当専任教員採用の募集があり、先輩の先生方や友人たちに後押しされるまま応募し、そして運よく、1997年4月に非常に稀な経歴の中で講師として着任、予想していなかった大学教員としての時間が始まりました。

定年退職を1年後に控えた平成27年度には、初等教育学科の鳥原正敏先生と始めた、図画工作データベースを活用した「たからばこ作戦」プロジェクトが科学研究費に採択されたことは、先進技術が目まぐるしく変化する分野の中においても、常に若い世代の友人に支えられ今日まで走り続けることができた大きな成果だと考えています。そして、私の人生においてたくさんの学びと成長の機会を与えて頂いた都留文科大学に対して、心より感謝するとともに、これからの都留文科大学の大いなる発展を祈っております。



「たからばこ」プロジェクト専用サイト

さよなら文大

退職教員からの言葉

都留、再び

英文学科特任教授 松土 清



今振り返る5年間はまるで一夜の夢のように感じます。文大は私自身の母校でもありましたのでこの期間はずっと再春の錯覚を禁じ得ませんでした。私は学生としては休学期間も含め5年間在籍しました。そしてまたもう一度同じ年月を同じキャンパスで過ごすこととなりました。私の強運に感謝しています。

その4月、春霞の桃源郷を丘から眺望するようなウキウキとした気分で文大に着任しました。御坂山系と御正体山に挟まれたこの小さな空間では、万の職員の責任を負うこともなければ千億の予算を執行をするわけでもない。ぶら下がり取材に煩わされることもなければ言質取られじの行政言葉に拘泥する必要もない。多くの純粋な瞳の学生達に囲まれ、自分の昼食代くらいを握り、思ったことを思った通りに喋る、ただそれだけで無限に広がる自由な世界の入り口に立った思いがしました。

本部棟4階角の窓からは赤レンガ広場から楽山までが一望でき、四季の移ろいや折々の学生達の動きが手に取るように見えます。1号館に出入りする人達の姿にほぼ半世紀も前の友人達の姿を二重写しにすることは講義の合間の至福の時間でした。この同じ空間に全国からの学生が集い、その時代その時代のキャンパスを共に築く喜びを分かち合う。そして卒業とともにまた全国へと巣立ち、その残像はあっという間に新入生に塗り替えられる。そんな繰り返しの中で、文大には濃密な人間関係に裏打ちされた独特の「場の感

化する力」があり、それを脈々と受け継いでいると強く感じています。

さて、大学に入学して間もなく私は実用英語研究会 PES に入会しました。英会話の訓練に加えて英語でビジネス文書を書いたり、弁論・暗唱大会と、今考えると当時の活動内容はとてもストイックなものでした。それでも耳慣れないお国訛りの人達と膝を詰めて学び合い語り合うこと自体とても新鮮に感じたものでした。昨年9月には当時の PES 仲間のホーム・カミングを企画し、キャンパス内で PES 現役生達との交歓会を持ちました。私達のすぐ上の先輩の時代に誕生した小さなサークルが半世紀近くもその血脈を絶やさなかったことへの OB 達の驚きと感動は現役生達にしっかりと伝わりました。このほかにも、この5年間の、学生の皆さんとの授業外での語らい、都留市との様々な連携、さらにはキャンパスでリスを目撃したことに至るまで思い出は語り尽くせません。

今まで歩いてきたキャリアの中で私が体得した法則はいくつもありますが、その中でも最も単純かつ最も効果を実感できた一つのモットーがあります。それは武田信玄の言か否かには諸説のある一節で

すが、「人は石垣、人は城」です。石垣は大きな石だけで造ることはできず、さまざまな大きさ、形の石をうまく組み合わせることが肝要です。私が在籍していた頃の文大から見ると今の文大は大きく変容しました。社会構造の変化や少子化が進行する中で、自力で進化できない組織は生きていけないことが自明であるのと同時に、組織自体の進化は組織を構成する一人ひとりの進化を前提とした石垣の強化であることに多言は要しないでしょう。私は母校文大にいつまでも昔のままで変わらずにいてほしいとは願いません。終わりのなき進化を心より願っています。

私にとって大いなる学びの場であったこの5年間は人生の財産となりました。初年度からの一つひとつの授業を再現できるような気えしています。諸般にわたりお世話になった皆様に心より感謝申し上げます。特にあらゆる場面でご支援くださった英文学科の皆様、ありがとうございました。



PES 交歓会にて

さよなら文大

退職教員からの言葉

A rolling stone gathers no moss.

情報センター特任准教授 黒崎茂樹



早いものでこの3月末で3年間の任期満了を迎えることとなりました。東京での引越作業が遅れてしまい、2013年3月のとある日の夜中、都留市に到着しました。凍てつく寒さのなか、空を見上げた時の光景が深く印象に残っています。…漆黒の闇夜に 凜と煌めく星々たち…。翌日、新居の界隈を歩くと、土筆の群生が…。ふと思い返せば、小学生以来、土筆をまじまじと眺めた記憶はあまりありません。

都留文科大学に赴任したこの3年間を振り返ると、「振れ幅」の大きい日々だったように思います。なんといっても忘れられないのが、赴任したばかりの2013年11月に左肩を骨折し、都留市立病院に2週間入院、リハビリで約1年間通院したことです。ご執刀いただいた関戸院長をはじめ、整形外科の先生や看護師・理学療法士など多くの皆様に献身的に治療・看護いただいたことは忘れられません。また、ほぼ毎日のように通った食堂のご主人と女将さんには、話し相手になっていただくなど、なにかと気を遣っていただきました。この場をかりてお礼申し上げます。教育・研究の面では、「教員養成」や「教育学」の一端に触れることができ、新たな知的好奇心を掻き立てられました。前任校では、私立の初等中等教育におけるICT教育の支援や環境整備にも従事しま

したが、今回、都留文科大学に赴任することによって、私立学校とは異なる公立学校の現状を知ることができました。またいくつかの国立大学附属小学校や中・高等学校の授業を参観し、さらに教職大学院開催のフォーラム等に参加する機会を得ることができたのも、都留文科大学に赴任したおかげです。これらの経験を通して得られた知見は、直接的・間接的に、今後の私の人生にとってプラスに働くことと確信しております。都留文科大学の学生は、全般的に控えめですが、真面目という印象です。高度な質問や深い分析をした最終レポートを提出する学生もいて、私自身、大変刺激を受けました。退職を機に、文大生と授業で接することが無くなることは残念ですが、時が来てしまいました。全国各地からご縁があつて都留文科大学に入学した学生、そして都留市出身の

学生に向けて、本を一冊紹介したいと思います。時折、私自身が大学附属図書館で読んでいた本です。「民話」や「昔話」は、その土地柄・人柄・思考様式を知るにあたって、参考となる貴重な資料です。改訂版[(2004) [388.151/N29]] も図書館で借りられます。是非、ご一読を…。

内藤恭義(編著)(1991)『郡内の民話』、都留:なまよみ出版。[093.88/N29]

さて、次のキャリアステップにむけて、新たなチャレンジの時が来ました。A rolling stone gathers no moss. なかなか融けずに氷となりつつある残雪のなか、空を見上げると、「カシオペア座」が、都留市に來た頃と同じように綺麗に輝いています。

短い間でしたが大変お世話になりました。都留市そして都留文科大学の更なる発展をお祈り申し上げます。



2015年度「教育メディアⅠ(小学校)」の授業にて

おくることば

自分で確かめる
習慣を初等教育学科准教授
平野耕一

私が本学に赴任したのは4年前ですので、卒業生のみなさんが入学したのと同時に大学に来たことになります。4年前の初等教育学科の新入生宿泊オリエンテーションに私も参加しました。当時のみなさんは「期待と不安」があったと思いますが、実は私も同じ気持ちで参加していました。素直で誠実な学生が多いというのが第一印象でした。今では卒業を迎え、ゼミ等で後輩に自ら教えている学生さんの姿を見て、頼もしく思いました。

我々の物理学ゼミでは実験が好きな学生が多く、4年生が集まって霧箱の実験（放射線の軌跡が見える実験）等をしていった事が思い出されます。物理学では、現象に対して仮説を立て、その仮説が正しいかどうかを実験等で確かめます。頭の中で考えたことに対して一つ一つ実験等を行い、それが真実かを実証して確かめていくのです。物理学にかぎらず、卒業生のみなさんには、自分の目を見て調べ、自分で確かめ、それを基に判断するという習慣をつけて欲しいと思います。今のインターネットの時代には非常に多くの情報があります。中には意図せず間違った情報もあり得



自然科学棟の天体ドーム

ます。自分にとって重要な情報を用いるとき、可能な限り自分の目を見て、自分で確かめ、関連した情報も考慮しながら吟味し、正しい判断をする力をつけて欲しいと思います。過去に多くの人が思いこんでいたことが実は間違っていたということは少なからずあります。天動説はその典型です。今年度にノーベル物理学賞を受賞した梶田隆章さんの業績は、これまでニュートリノには質量がないと考えられていた定説を覆し、質量があることを実証したものでした。

卒業生のみなさんがこれから進んで行く社会は、今まで以上に厳しいものかもしれません。自分の希望する職に就くまでに時間や労力を要したり、正規の職に就いても将来が保証されないという場合もあると思います。しかし、「私は〇〇が得意です」と胸を張って言えるような“圧倒的な努力に基づいた専門性”を是非持って、厳しい時代を乗り越えて行って欲しいと思います。

卒業論文という財産

国文学科准教授
野口哲也

卒業おめでとうございます。私も4年前に本学に赴任し、皆さんと同じ時間を過ごしてきました。期待と不安の入り混じった思いで都留に来て、全国から集まった仲間の個性に刺激を受けながら、時には怠惰にも過ごし、集大成としての卒業論文を書き終えた充実感とともに、これまでの時間を振り返っているのではないのでしょうか。そんなことを想像しながら、私は皆さんの労作を読んでいるところです。

私は最近、学生を見る眼が少し変わってきたという自覚があります。大学教員になった当初は良くも悪くも妥協ができずに自分も学生も苦しんでいましたが、都留に来てからは、学生諸君の意欲や主体性にかなり信頼が置けることが分かってきて、私はそれを見まもり、必要なときに助言すればよいと考えるようになりました。計画的に地道に執筆を進めた人の卒論も、年末まで構想を寝かせて追い立てられるように強引に書き上げた人の卒論も、それぞれの4年間で反映されたものとして読んでいます。

私自身が卒論を書いたのはもう20年近くも昔になります。いま見返してみても恥ずかしくなる内容で、到底自慢

おくることば

卒業式は 終わりでなく始まり



英文学科教授
今井 隆

できるような代物ではありませんが、それでも数年に一度くらいは、自戒のために、あるいは若かりし日の思い出に浸るために開いてみる必要があります。それはもしかしたら、研究室の伝統として、手書きの原稿用紙を和綴じで製本して提出しなければならなかったため、副本も捨てられずに手元に残っているからかもしれません。もちろん下書きはパソコンで書くわけで、思い思いの千代紙で表紙を作る楽しさはともかく、締切間際に原稿を手書きで清書し直すのは無駄な作業としか思えませんでした。そんな苦労も、大学で過ごした4年間という時間を自分の人生の中で意味あるものとして形に残し続けるためには良かったのかなと思っています。皆さんが今同じことをする必要はありませんが、自分なりの達成も不十分な欠点も確実に刻まれた卒業論文は、ゼミの仲間と議論の上に出来上がった財産ですから、是非いつまでも大切にしてください。できればパソコンやUSBメモリの間にデータとして残しておくだけでなく、提出したのと同じ形で自分の身近や実家におき、たまには見返して自分が学んできた4年を振り返ってみてください。

卒業式といえば、友との別れ、長らく通った学校との別れと「終わり」のイメージとして捉えられています。しかし、アメリカ英語では、卒業式(日)は、Commencement day と言います。文字通り訳せば「始まりの日」ということです。終わりではなく、これから各々が新たな道への旅立ちを意味します。「別れ」とか「終わり」ではなく、不安は少しあるが、新たなことへの挑戦が待っていて、ワクワクもします。

ここで、新たな出発をする皆さんに提案をします。

生涯学習は、人として続くなくては、いけないことです。読書ならほんのわずかな時間でもできます。そしていまや、読書の形態が変わってきました。紙の本から電子の本へ。このことは、人類にとって大変革を意味します。いまやiPadに何千いや何万冊もの電子書籍を入れて持ちあるくことができます。また、eLibraryや世界の大学図書館が提供する電子図書館にアクセスすることができ、真夜中でも読書できます。読書は、いまやubiquitousの時代になりました。だから勉強も

ubiquitousの時代です。私がアメリカに留学していた3年生の時の恩師が、「良書は、何よりの先生です。ただし、一生のうちに読める本はごく限られています。だからまずは、読むべき本と読む必要のない本を見分ける能力を持ちなさい。」と言っていました。この言葉は、今も心に留めていて、読むべき本の選定ができるようになりました。

さらにアップルが提供しているiTuneU(Uは、Universityの略)を利用すれば、世界の有名講義が聴講できます。iPadやiPhoneでダウンロードしていつでも視聴できます。

英語の高度な運用能力があれば、留学しなくてもいつでも世界の名門大学や大学院の講義が受けられます。さらに無料です。iPadがあれば、もう他に何もいりません。

最後にアップルコンピュータの創業者でCEOであった故Steve Jobsのスタンフォード大学の卒業式での名スピーチの最後の言葉を皆さんへの送る言葉にします。

“Stay hungry,
stay foolish!”

解釈は難しい。「満足せずもっと学べ、固定概念で決めるな! (冒険せよ!)」

おくることば

社会学科生に贈る
処世訓社会学科准教授
菊池信輝

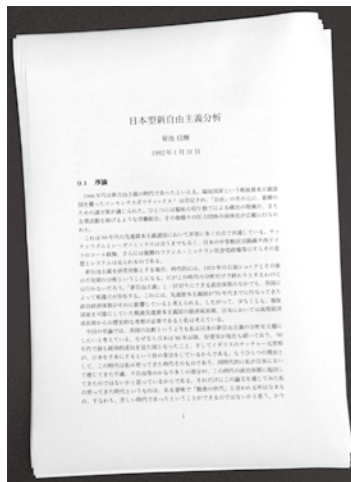
社会科学の徒である私たち（みなさんも卒業されたら私たちと一緒に、このように呼ばせて頂きます）は、けっこう世の中に出て辛い思いをします。

まず間違いなく、思いつきに過ぎなかったり、根拠が薄い理由に基づいた事業や仕事をやらされるとイライラします。もし、社会学科に入っていなければ、つまり、理論的に諸事象の根拠を追求する能力をもったり、社会調査系の科目を学んでデータを扱えるようになっていなければ、こんなことに悩まなくてよかったのに・・・。

視野が狭い人間との付き合いも肩が凝るものです。みなさん、当初は教職を目指していた関係もあり、社会学、経済学、法学、政治学、哲学、倫理学といったいわゆる六学をしっかり勉強してしまいました。同じ社会科学系の大学でも、法学部や経済学部に入っていれば、これだけ幅広い教養を持つ必要はなかったのです。

これでは、レッテルを貼り、二分法でしかものを考えられない人たちがうまくやれという方が無理です。

また、みなさんは2年生からゼミに入り、専門分野について他のゼミ生、そして教員とも徹底的に議論し、そこで身につけた論理性や情報処理能力を駆使



私もこんなものさえ書かなければ・・・。

して卒業論文まで仕上げてしまいました。

しかも、社会学科の先生方には、みなさんが自分で仮説を構築し、それを自ら証明するまでアドバイスを与えるだけに留め、見守り続けるという対応までされてしまいました。アクティブ・ラーニングなどと、最近しゃれた言葉で言われる教授法を施されてしまっていたのです。

この結果、あろうことか、グローバル化に伴い、様々な出自を持つ方たちと議論し、まとめながら仕事をしていくことが必要とされる世の中で、みなさんは有為な人材と目されることになってしまったのです。

せめて社会学科の教員が、みなさんに自分の考えを押しつけ、卒論のテーマも決めてしまっていたら、そこまで能力が高まることは無かったですよ。

どうかこの現実を受け入れ、イライラしながらも周りの人たちをまとめ、少しでもいい世の中にするために一緒に頑張ってくださいますよう、心よりお願い申し上げます。

感謝の心を忘れずに

比較文化学科准教授
水野光朗

本日卒業されたみなさん、ご卒業おめでとうございます。まさに、小鳥の翼がついに大きくなって旅立ちの日を迎えられました。ご卒業に際し、私から一言おくることばを、とのことで、この機会に、個人的な所感を申し上げます。

みなさんは、本日、晴れて本学を卒業されたわけですが、これはひとえにみなさんの努力もさることながら、周りの方々に支えられて初めて成し遂げることができたことを、まず申し上げたいと思います。そして、みなさんを支えてきた方々に感謝することを決して忘れてはならないと思います。

みなさんを支えてきた方々は、ゼミや授業でお世話になった先生方、事務職員の方々は言うまでもなく、みなさんがこの都留の地で学ぶことを、衣食住さまざまな点において、あたたかく、時には厳しく、見守ってきた都留市の方々です。私は、今般、このおくることばをしたためにあたって、『学報』のバックナンバーを何号かひも解いてみました。卒業されるみなさんがしたためられた「旅立つことば」で、都留市の方々に感謝のことばを述べているものが、かならずしも多くないことに気づきました。

みなさんの多くは、本学の地域交流センター、COCをはじめとする、都留市と深いかわりをもつ様々な活動に参加し、地域との交流に積極的に取り組

おくることば

まれました。SAT やサークル、ボランティアなどで、地域とつながった経験をお持ちの方も多々と思います。卒業に際して、ぜひ、こうした経験に思いをはせ、地域の方々にたいしても感謝とお礼の気持ちをお持ちいただければと思います。

さらに、本学では、勉学に励むみなさんを経済的側面からも支援するべく、平成 26 年度から遊学奨励金、成績優秀者奨学金、グローバル教育奨学金といった制度を創設しました。また、授業料免除枠も大幅に拡大しました。特に授業料免除枠については、他大学に例を見ないほど充実したものであり、多くのみなさんが活用されました。あくまで私の個人的な所感を申し上げると、みなさんは、こうした諸制度を積極的に活用され、学業はいうまでもなく、人格の陶冶にも励まれ、大きな成果を上げられました。

ところで、こうした諸制度の元となっているお金は、どこから出ているのか考えたことはありますか。都留市の方々をはじめとする国民の貴重な税金です。特に、日本全国から都留市に寄せられた「都留市ふるさとづくり寄附金」は、国際交流会館の建設、遊学奨励金、成績優秀者奨学金、グローバル教育奨学金等、本学のさまざまな活動に充てられています。したがって、みなさんは、こうした原資を負担している方々にたいしても感謝とお礼の気持ちをお持ちください。よろこんで税金を払う人はほとんどいませんから、国民（もちろん都留市の方々も含まれます）の期待に応えるべく、本学で学んだ成果を、今後羽ばたいていかれる実社会において、充分に発揮されることを希望し、私からのおくることばといたします。

大学院修了生に
おくる言葉

大学院研究科委員長
英語英米文学専攻教授
中地 幸

大学院修了、おめでとうございます。修士論文（修論）を書き終えて、これまでにない解放感や充実感を味わっているのではないかと思います。口述試験も緊張したかと思いますが、いかがでしたでしょうか。

修論は、研究者としての第一歩のようなものですが、どこか作家の第一作に似たところがあります。作家の第一作には、その作家の終生のテーマやその文学の真髄のようなものが表れるものです。修論にもそういったところがあります。原石の輝きとでもいうのでしょうか。学生が一生懸命書いた論文には、まさしく輝くものがあります。しかし同時に、修論ほどその人の欠点を露呈してしまうものもあります。まだ欠点をカバーするような技量がないだけに、粗削りになったり、言葉が足りなかったりします。先行研究を十分におさえていなかったり、考察が浅かったり、構成に問題があったり、論拠が十分でなかったり、そういった点を注意された人もいることでしょう。

しかし欠点はあってよいのです。欠点こそ、伸び代（しろ）であるからです。私が研

究しているアメリカ文学の作家にリチャード・ライトという人がいますが、私にとっては、彼の最初の短編小説集である『アンクルトムの子どもたち』（1939 年）が彼の全作品の中で一番魅力的です。若さゆえの青臭さもある作品ですが、ここには人種偏見に根ざした暴力への告発に挑んだライトの中の炎ともいうべき不屈の精神と信念が見られます。修論も同様です。どんなに上手に書かれていようとも、何ら炎のない修論には、未来はありません。

現在の教育界では、全てに「基準」を設けられたり、点数化されたりする傾向があります。本学でも修論に「論文評価基準」が設けられました。明確な指標があるというのは大変よいことです。しかしながら「本当に大切なことは目に見えない」という『星の王子さま』のメッセージは、全てを同じ物差しで測ろうとする現代社会に警鐘を鳴らすものでもあるでしょう。ドイツの文芸批評家ヴァルター・ベンヤミンの博士論文は審査員の教授たちが理解できなかったために、一度は却下されたそうですが、まさしく「基準外」の好例です。

修了にあたり、今一度、修論を読み返し、自分自身を見つめ直して下さい。あなたの人生そのものの指標となるものが修論の中にあるはずです。

旅立つことば

新しいことばかりの
日々初等教育学科4年
坪野裕貴

私が都留文科大学に入学してからもう4年が経ち、「卒業」という二文字が近づいてきました。今になってみると本当にあっという間な日々でもあり、楽しかったこと、大変だったことなど多くの思い出がよみがえってきます。高校までとは違う主体的に行われる大学の授業や初めての一人暮らしに戸惑った1年生。後輩が入学し成人式も迎え、精神的にも大人に近づいた2年生。ゼミに入り新たな仲間たちと勉強に励んだ3年生。教員採用試験と卒業論文に忙しかった4年生。この4年間で振り返るときがありませんが、1人の人間として本当に成長できたなと今は実感しています。また、クラスメイトやサークルの先輩後輩、ゼミの仲間、数多くのすばらしい先生に出会うことで、新しい刺激が絶えない日々を過ごすことができました。

中でも3年生で経験した教育実習は、自分の教員への気持ちを改めて感じることができました。1、2年生の時は教員という職業を意識する機会があまりありませんでしたが、実際の現場に立つことで子ども達と共に過ごす楽しさを見つけたとともに、今の自

分に足りない部分というものが見つかる貴重な時間になりました。今までは教師になれたらなという思いだけでしたが、「子どもの気持ちをしっかりと聴き、子ども達と共に楽しい授業をしていけるようになりたい」という目標ができました。漠然とした教員への目標に変化があった教育実習は今でも印象に残っています。

卒業後は私の地元である富山県で小学校教員としての新しい生活が始まります。卒業することで大学時代の仲間たちと離れ離れとなってしまうことは正直さみしい気持ちもありますが、他の地で共に頑張る仲間がいると思うと頑張っていけます。都留文科大学で経験したことを生かして、さらに一歩先の自分になれるよう努力し続けたいと思います。

最後になりますが、都留文科大学で出会った全ての方々に向けて、本当にありがとうございました。

わたしの四年間

国文学科4年
小林千絵

私がここ、都留で新しい生活を始めたのは、2012年3月末。家族が大好きだった自分が親元を離れるなんて、あの時の私に一体何があったのだろう。今でもそう思うことがある。それでも、あれから4年、この土地で過ごしていく中で得たものは数え切れないほどある。

その中でも特に思い入れの強いのは、同じ野口哲也先生の近代文学ゼミで2年間で共にした友人達の存在だ。大学生活の集大成ともいえる卒論を執筆する上で欠くことの出来ない大切な授業であるゼミ。3年生に進級してから、初めての授業。顔合わせでは、馴染める子とそうでない子がいるのだろうと漠然と思っていた。しかし、ゼミ長という係を担う事が決まったと同時に、ゼミ長とはこの学年の空気を、雰囲気を整える大役であるということに気が付き、そんなことは言っていられない立場であることにも気がついた。しかし、私の緊張に反して、同期の14人は明るく、そしてとても視野の広い人ばかりだった。自分にはなかった見方を教えてくれたり、家族の事、恋人の事、なんでも話すことが出来る友人が、わ

旅立つことば



ゼミの仲間と先生

たしにとってかけがえの無い存在となっていった。

都留文科大学への進学を決めたあの頃の私は、自分を変えるためには知らないものを見なければいけないと思っていた事を、最近思い出した。見知った実家の周りの景色ではなくて、今まで見る事の出来なかった物事を自分の目で確かめたかったのだ。私は今、漠然とした考えから始まった4年間に幕を下ろそうとしている。友人のみならず、すべての出会いに意味があるのだと、今になって実感するばかりだ。この2年間で学んだ、「自ら周りに手を伸ばす事」を怠らず、4月から始まる長い長いこれからと向き合っていきたい。そして、親元を離れ友人達と過ごした4年間は、必ずその糧になると信じている。いま、4年間でお世話になった人々に、そして私と友人を繋いでくれたこの大学に伝えたい言葉は一つだ。4年間、本当にありがとうございました。

たくさんの感謝を胸に

英文学科4年
今野翔介

卒業を目前に控え、4年前の入学式終了後のことが鮮明に思い返されます。母が引越しの手伝い等で都留に来ており、いよいよ帰るときに、駅まで見送りに行き、私は涙があふれそうだったので、「じゃあね」と言ってすぐにその場を去り、家に帰り一人泣きました。その時、涙ながらに「絶対に教員になる」と決意したことが、4年間、私の目標になり、大学で出会ったかけがえのない人たちがいつも私の夢を支えてくれました。

大学では、自らの主体的な学びや「自律した学習者」であることが求められ、何事にも積極的に取り組みました。4年間、すべての授業に無遅刻・無欠席で参加したことが私の誇りです。3年生から三浦先生のゼミに所属してからは、英語教育に関する識見を高めることができました。ゼミでは、「いかに課題を発見し、どのように考え、状況に応じて最善策を判断するのか」という能力を身に付けることができました。

4年生になってからはほぼ毎週「自主

ゼミ」を開き、みんなで今まで学んだことを復習したり、教員採用試験の前には模擬授業をし、互いにフィードバックを出し合ったり、また、卒業論文について学び合いながら更に親交を深めることができました。最後の卒業論文は苦戦しましたが、先生の熱心なご指導のおかげで、納得のいく論文を完成させることができました。今後は論文のテーマを英語教師としてのライフワークとしていきます。

こうして4年間を振り返ってみると、私にはいつも応援してくれる人がいました。遠くからいつも見守ってくれた両親、温かく指導してくれた大学の先生、そしてかけがえのない仲間たち……。みなさんに出会えたこと、それが4年間の何よりの宝物です。「都留文科大学を選んだ君の選択肢は間違えていなかった」。4年前の自分に胸を張ってそう伝えてあげたいです。四月から北海道で高校の英語教師として働きます。教員になるという夢を支えてくれたすべての人への感謝を忘れずに、生涯学び、成長し続ける教師を目指します。



三浦ゼミのみんなと

旅立つことば

旅立つ言葉



社会学科
現代社会専攻4年
岸本晴朗

卒業を目前に控えて、不安と希望が入り混じっている。変化の節目となる時期はいつもこうだ。受験の時でも、もっと良い選択肢は無かったのかと、女々しく思い悩んだものであった。

地元を離れ、初めての一人暮らし。引っ込み思案の私であるから、当然、気がかりな点がいくつも浮かんできた。人間関係がうまく築けるか、火の用心や防犯は大丈夫か……。今思えば、馬鹿らしいと感じるものもいくつかあった。

都留での生活で気づくこととは、人と人との距離が近いことである。入学前にも調べて知っていたことであったが、噂の広まる速度や、初対面の人であるのに、辿れば共通の知り合いにまで行き着くことがある点にはわかっていながらも驚いた。

サークル活動、ゼミ、地域の活動への参加を通じて、知り合いは増えていった。その中で少しずつ入学当初に抱いた不安は解消されていった。色んな人と様々な方たちで交流することで、少しは自分の価値観を磨くことができたのではないかなと思う。

大学4年間を含めこれまで



私の好きな都留の風景

の人生を振り返ると、一体何人の人に自分はお世話になったのであろうか。経済的にも精神的にも支えてくれた家族。くだらないことから真面目なことまで付き合ってくれた先輩・後輩・友人たち。卒業論文の指導や興味深い授業をしてくださった先生方。世間知らずな私を温かく見守ってくださった地域の方々。見えないところで助けてくれた方々。実に多くの方々に支えられてここまで生きてきたことがわかる。

卒業はゴールではない。人生は一生、勉強である。大学生活で見え始めた課題に、これからも取り組み続けていきたい。どうせ、悩むのである。深刻に考えすぎずに、大きく構えて生きていきたい。そして、今までお世話になった人への感謝の念を忘れずに、これからの新しい時代に貢献できるようにになりたいと思う。

最後になってしまったが、これまでお世話になったすべての方々への感謝の言葉を述べて、結びと変えたい。本当にありがとうございました。

振り返れば
あっという間

社会学科
環境・コミュニティ
創造専攻4年
上西きり子

ちょうど4年前、北海道の田舎出身の私は、東京に近い！とわくわくしながら都留の町に向かったわけですが、大学が近づくにつれ緑の多くなる車窓からの景色に、衝撃と不安を与えられたのを忘れません。あんまり娯楽が無いから、都留なりの娯楽を見つけようと、まちのあちこちを歩き回ったことを思い出します。しかし、だからこそ「まちを見つめる」という行為の重要さを学べたのかもしれないね。自発的に動ける環境にいられて良かったなあと、今になって思うことができます。

思っていたより東京が遠いと愚痴をこぼすことも多かったのですが、就活の際にはかえって「遠くからわざわざ来ていただいて」と言っていただけることがあって、良いアピールになりました。おかげさまで(?)、大学で学んできたこと、特に都市環境設計論ゼミで学んだことをそのまま生かせるマンション開発・営業のお仕事に就くことができました。

4年間の一番の思い出は、2年の夏にフィールドワークで瀬戸内国際芸術祭に行ったことです。今までに見たこと

旅立つことば



瀬戸内国際芸術祭にて（犬島）

も聴いたこともないような、思いがけない芸術にたくさん触れられた、たいへんに貴重で刺激的な経験でした。授業というよりは、ほとんど観光のようでしたが（花火をやったり UNO をやったり）、都市環境設計を学ぶ助けになる感性を、少しは養うことができたんじゃないかなと思います。ちょうど猛暑日が続いたあの夏、豊島で食べたかき氷が今までで一番美味しかった……。

当初は一瞬、刑期のようにすら思えた大学生活4年間でしたが、振り返ればあっという間で、サークルの仲間と遊んだことなんかよく思い出して、そういえばみんなとのおしゃべりもあっという間に時間が過ぎてたなあ、なんて思いますね。本当に早かった、そして、最初に思っていたよりはるかに楽しい時間だった。これからは今までとは全く違う場所で全く違う生活を送ります。でも、これからのことには、都留文科大学で過ごした経験が生きてくるのでしょ。私にこのような経験をくださった先生、両親、友人、地域の人々に感謝いたします。ありがとうございました。

充実した学生生活

比較文化学科4年
梶原彩加

新しい生活への緊張と不安、そして期待を胸に迎えた入学式のこと、昨日のことのように思い出されます。4年という月日はあっという間でしたが、充実した大学生活を送ることができました。

私が都留文科大学への入学を決意したのは、韓国語や韓国の文化について学べる環境が整っていると感じたからです。私には韓国留学という目標がありました。

大学1年次の春と2年次の夏に、邊先生に紹介していただいたソウルの高麗大学での語学研修に参加しました。韓国語授業を含めた現場学習や韓国文化プログラム体験を通して韓国留学への思いは一層強くなり、3年次に1年間、韓国外国語大学に留学しました。

交換留学では、生きた韓国語を学んだり、韓国文化と歴史への理解を深めたりしたことはもちろんですが、アジアやヨーロッパなど世界各国からの留学生と交流を深めることができました。様々な国の留学生と生活を共にしたり、授業でのグループ発表をしたりしていく上で、言語や文化の違いから何

度も壁にぶつかることがありましたが、自ら考え主体的に行動していくことで乗り越えていくことができました。韓国留学は自分自身を成長させてくれるよい機会となりました。また、留学中に会った友達とは今もお互いの国を訪れたりするなどして交流しています。都留文科大学での日々の授業や友達と過ごした時間はもちろんですが、留学の経験は私にとってかけがえのないものとなりました。

日々の授業はもちろんのこと、留学へのご助言やご支援をいただいたり、卒業論文の執筆に関して丁寧にご指導していただいたりと、邊先生には大変お世話になりました。

私が充実した学生生活を送ることができたのは、友達や先生方そして家族の大きな支えがあったからだと思います。支えてくださった方々への感謝の気持ちを忘れずに、学生生活で学んだことを活かしながら、社会人として成長していけるよう努力をしたいと思います。4年間本当にありがとうございました。



語学堂の野外授業でクラスの皆と

旅立つことば

文大での学びを大切に



文学専攻科
教育学専攻
初鹿貴大

2016年3月22日、5年間学んだ文大を去る。

私は中学生の頃から「教師になる」という夢を抱き、その夢を叶える為に、地元山梨で教員養成大学として有名な文大に2011年4月、入学した。そして学部卒業後、更に教育や教職についての専門性を高める為に、専攻科に入学した。こうして5年間、文大で学んだわけであるが、私は心から文大に入学し、学ぶことができたことを嬉しく思っている。

それは、文大で教師を目指して教育や教職について学ぶ中で、これまで私自身が持っていた教師像や教育観というものを見直すことができ、さらに、実際に現場に立った時に大切な教師としての考え方や視点を身に付けることができたからだ。

私は大学入学まで、「教師＝教える仕事」という印象が強かった。私は勉強や教えることが好きだったため、それ



この1年間学び合った
専攻科のメンバーと

を活かせる職業として教師という道を選んだ。

しかし文大で、教育学を専攻し教育について深く追求したり、実際に現場で教師をなされていた先生方と出会い、実際の授業実践や今の子どもたちの状況について学んだりした。その中で、教師というのは、これまで自分が描いていた「教える仕事」という側面だけではないことに気付いた。教師は、子どもたち一人ひとりに対して寄り添い、理解し、それに応じた授業を考え、実践したり、時にはその子どもが抱える困難（障害や家庭の事情等）に対して丁寧に寄り添い、少しでもその困難が解消できるように手助けをしたりする役割があるということが分かった。教師には本当に多くの仕事があり、これまで考えていた教師像は大変浅はかなものであったと反省し、これまでの教師像を見直すきっかけとなった。また同時に、教師の仕事がいかに責任重大かを痛感することができた。私は、教育や教師の役割の本質について5年間の文大での学びを通して、深く学ぶことができた。

最後に、私は4月から地元山梨県で念願の教師となる。教師という夢を実現できたのは文大での学びのおかげであると感じている。この文大で学んだことを大切にしながら、これからの教師生活を歩んでいきたいと思う。5年間お世話になりました。関わってくださった先生方や友人に心から感謝申し上げます。

知を楽しむ



大学院
国文学専攻2年
伊藤貴彦

高校教師としての素養を身につけることを目指した2年間、思い返すと期待以上のものを得られたと感じます。

学部では第8次学習指導要領下における国語科を研究し、修士課程では研究の範囲を広げ第5次以降の学習指導要領を対象としました。学会や研究会での発表も経験し、2年間常に自身の見識を深めることができました。研究の成果は今後の教師生活において自身の職能の根幹をなすものとして位置づけられるものです。

大学院の講義では専攻する分野を問わず国文学に関する学びを行うことができました。マンツーマンで言語に関する奥深さを教えていただいた加藤浩司先生の講義、漢文を精読する能力を飛躍的に向上させることができた寺門先生の講義、歌舞伎や文楽を肩肘張らずに「楽しむ」意識と方法を学んだ加藤敦子先生の講義、「散歩」というテーマで多くの近代文学作品を関連づけながら読んだ野口先生の講義。毎回新しい知見を得、自身の視野を拡充することができました。

高等学校の現代文教材を扱った阿毛先生の講義では、

旅立つことば



慣れ親しんだ院生室

文学作品を教材に昇華する方法を検討しました。また発表の際には新見先生にご助言をいただき、学校現場の考えを意識しながら研究することができました。

共に学んだ院生の方々にも刺激を受けました。院生が全員受講した長瀬先生の講義では、『源氏物語』という大きなスケールの作品に対し、それぞれが異なったアプローチで研究に取り組みました。彩り豊かな研究の姿勢に強く刺激を受けたことを覚えています。

また、牛山先生には学部から4年間という長期に渡ってお世話になりました。先生のご指導ご助言がなくては、大学院への進学も研究の完成もあり得ませんでした。この場を借りて感謝申し上げます。

大学院に進学したことにより、国文学に関する知識と学問を楽しむ態度を学ぶことができました。2年間で得た力を今後の教師生活で生徒たちの育成に活用することで、支えて下さったすべての方々への感謝を表していきたいと考えます。本当にありがとうございます。

旅立つ言葉



大学院
地域社会研究専攻2年
渡邊里穂

私は社会科の教員を目指し、この都留文科大学に入学しました。入学したばかりのころは、教師という職にリアリティーを持てず、とりあえず免許はとろうという消極的な気持ちでいました。この認識を全く回転させてくれたのが、大学4年生の時にに行った教育実習です。実習を高校で行ったこともあり、より専門的な知識、より多くの関心に応えられるようにならなければいけないと考え、大学院に進学することに決めました。

大学院での学びはまさに「応用編」であり、基礎的な知識に基づいて、現在の社会問題に対してどのようにアプローチするのかという実践的な視点から学ぶというものでした。そのため、単に知識量を増やせばよいということではなく、課題を設定してそれを解決するという問題解決型の思考の重要さに気づきました。

教育実習で一番難しかったのが、この教材で何を教えるかという目的を設定することです。なぜなら、この教師の問い

かけから学びがスタートしていくからです。その点で大学院では、哲学、歴史、憲法、政治等のあらゆるアプローチで現代社会の論点を学ぶことができ、実際に児童・生徒と行う授業を豊かにすることができるようではないかと考えています。

また、小学校での教育実習を行い、以前実習を行った高校との違いや、現在の子供たちが何を考え、親は教育に対して何を期待しているのか、知ることができました。私は4月から小学校の教師として働きますが、授業を行うことだけではなく、児童とどのように関わり、信頼関係を気付いていくかという実践的なことについて学ぶことができました。子供たちは、教師が思いもしないようなところに躓きます。授業の展開を完璧に作ったと思っても、それ通りにいくことはなく、さらに子供たちの興味や関心によってより深い学びができることもあります。そういう意味で、教育は対話であるということを実感しました。本当に多くのことを得た6年間でした。



大学院生室での学習の様子

旅立つことば

充実した2年間



大学院
英語英米文学専攻2年
園部敬祐

大学院生としての生活を振り返ると、部活動とアルバイトに明け暮れた学部生時代とは対照的に、自分のやりたいことに専念する時間を持つことができ、とても充実した2年間でした。勉強面では、大学院の授業は少人数で行う授業のため、先生方との距離が近く、そのような環境で指導していただいたおかげで、2年間という限られた期間で多くのことを学ぶことができました。ゼミの先生である儀部先生はもちろん、大学院の授業や大学院主催の講演会や説明会といった業務を通して、竹島先生や中地先生といった他の先生方ともつながりを持つことができたのも、大学院に進学したおかげだと思います。そのような機会を通して、様々な先生方から助言やサポートを頂いたことは、私にとってとても貴重な経験となりました。

また、勉強以外でも授業の合間にジムに通って体を動かしたり、OBとして部活に顔を出したりするなど、自分から積極的に動くことができました。とはいえ、本来であれば社会人としてすでに働いている年齢なので、「学生ではあるけれど社会人としての



お世話になった先生方と他の院生

自覚をもって行動するように」という中地先生が入学当初に私たち院生に言ってくださった言葉を常に考え、行動するとともに、大学院進学という自分の選択に理解を示してくれた両親に感謝し、恵まれた環境にいるということを忘れないように心がけました。そして何より、私が大学院まで勉強をすることができたのは、学校の制度による援助を受けたことによるところが大きいです。アルバイトによる収入だけでは、生活するだけで精一杯であった私にとって、授業料の減免制度やティーチングアシスタントによる収入は、時間的、経済的余裕をもたらす要因となり、その分勉強や研究に時間を割くことができました。このような恵まれた環境のおかげで、4月からは地元である新潟県の教員として働けることとなりました。今まで支えてもらった人たちへの感謝の気持ちを忘れず、都留で学んだことを今後に生かしていきたいと思います。

旅立つ言葉



大学院文学研究科
比較文化専攻2年
菊池有紗

心理学者ケリー・マクゴニカル著『スタンフォードの自分を変える教室』(大和書房)。意志の力を行動に結びつける実践的方法が学べるこの本を、4月から働く会社の方に読むよう勧められました。意志力を身につけると「できる・できない」ではなく、「やるか・やらないか」と自らの考えを行動に移せるようになる」と筆者は述べています。

私はこの意志力を、都留文科大学で過ごした6年間で培えたと感じています。大学生活は、朝起きるも然り、学ぶも、遊ぶも自己判断に任されるものですが、多くの学生が一人暮らしをし、友人との距離が近い都留文科大学で過ごせたことで、私はより精神的に成長できたと感じています。傍らを見ると自分では考えもしなかったことを実践している友人がおり、多くの刺激を受けると共に、誇りに思いました。様々な学生が身近にいたからこそ、私自身も意志力を身につけ、考えを実践する勇気を養うことが出来たのだと思います。

私は、高校生の頃に「フラメンコはインド舞踊に由来している」という事実衝撃を受け、そこで世界中の舞踊は

旅立つことば



何らかの共通点があるのではないかと頑固に、よく言えば一途に信じてきました。この時抱いた夢は、大学院に進学し、研究の進んでいない民族舞踊を自分自身が研究し、新たな分野を開拓したいというものでした。考えていただけでは、この夢は叶わなかったことでしょう。都留文科大学という特別な環境で様々な出会いを経験し、時には思い切って飛び込んでみることも大切だとの考えに至りました。念願の大学院進学を果たし、進学のきっかけとなった「フラメンコ」の近代日本における受容をテーマに修士論文を書きあげたことは、私の自信となっています。この自信を胸に4月からの新生活に望みたいと思います。

行き詰った修士論文のテーマに方向性を示し、拙い文章の論文を丁寧に指導して下さいました山本芳美先生をはじめ、サポートして下さいました先生方、友人、私の夢を理解してくれた両親に、感謝しています。

出会いから学ぶ



大学院文学専攻科
臨床教育実践学専攻2年
崎田香穂

大学生生活・院生生活のなかで一番衝撃的だったのは「演劇」との出会いである。観劇の際にダイレクトに伝わってくるつくり手の熱量や思いは、様々な葛藤や後悔、罪悪感を抱えながらそのことを乗り越えようとしないうちに大学に入学していた私の「からだ」を大きく揺さぶるものであった。サークルでの演劇づくりを通して私は演劇の楽しさとともに自分の「こころ」と「からだ」が徐々に劈（ひら）いていくことを実感した。

大学では、児童・生徒ではなく教師の視点からの「教育」を学んだ。それは、それまで私が認識していた「教育」とは違う新たな「教育」との出会いであった。教師のねらいや思いを見聞きしながら「子どもたちにいかに“学び”に興味を持ってもらうか」という問いと対峙し、探っていくなかで自分が感じていた演劇の楽しさを取り入れることを考えた。

そんななか演劇づくりを通じた人々の「からだ」の変化にも興味を持ち始め、それが大学院での研究の目的となっていく。

大学院での授業では、それまで臨床教育についてそれほど学んでいなかった私と周りの院生との知識量の差に気づかされた。その中で先生方や先輩、同輩、後輩と授業や研究について語り合い、深め合うことが出来たのは私にとって非常に有意義な経験であり、多くのことに興味を持ち学んでいくきっかけとなった。

研究を進める過程で思ったような結果が出ず、立ち止まることがあった。演劇が好きだから研究を始めたはずなのに演劇を嫌いになりかけた時期もあった。そんな時、支えてくださったのは指導教官である鶴田先生であり、相談に乗ってくださった筒井先生や私より一足先に社会に出た友人たちである。時に厳しく、時に優しく励ましてくださった方々のおかげで私はゆっくりだが一歩ずつ前に進むことができた。

様々な出会いを得ることができた都留文科大学で過ごした時間に感謝の念を抱きながら、これからも「教育とは何か」「演劇とは何か」を問い直し続け、深めていきたい。



演出として参加した公演の舞台

初等教育学科 平成27年度卒業論文題目

麻場 一徳ゼミ

- 池内沙耶香 女子400mハードル走におけるレースパターンとパフォーマンスの関係
園田亜莉沙 立幅跳の観察的動作評価による児童の跳運動に関する研究
原田 優己 女子100mハードル走におけるレース分析
福岡優里奈 観察的動作評価から見た小学生の投動作に関する研究
仲森 裕実 跳び箱運動「開脚跳び」の指導方法に関する研究 ―第一空中局面に着目して―
上浦 千明 女子800m走のレース分析 ―レースパターンとパフォーマンスとの関係―
中村 美咲 800m走に関する研究 ―400mタイプと1500mタイプに着目して―
池嶋 祥子 陸上競技女子4×400mRのレース分析
塚越 彩 小学生80mハードル走に関する研究 ―13年前と比較して―
日比 湧貴 総合型地域スポーツクラブについての事例研究 ―都留アスリート倶楽部の場合―
腰原 誠 男子三段跳における助走・跳躍技術が記録に及ぼす影響

市原 学ゼミ

- 相原 真波・赤嶺 菜・浅田英理奈
足羽 茜・川上 将敬
注意欠陥・多動性障害における自己認知の歪み ―双極性障害による影響―
緒方 太一・高山 千鶴・伊達 絢可
寺西 彩乃
注意欠陥・多動性障害(ADHD)および破壊的行動障害における衝動性
―その症状はドーパミン系、それともセロトニン系の制御不全のいずれによるのか―
寺田 優太・新名 由佳・樋口 宥芽
渡辺七菜子
感情障害に関わる認知行動的特性

岡野 恵司ゼミ

- 本宮 明佳 オペレーションズリサーチ ―秘書問題―
市川 由奈 パスカルの三角形にひそむ数列
脇坂 岳 フェルマー素数と正多角形の作図
中島 季恵 五色問題から四色問題へ
櫻井 優 ビー玉落としの不思議
山上 淳美 『オイラーの多面体定理』とその応用
石川 由菜 友愛数 ―サビトによる判定法―

長村 吉洋ゼミ(山森 美穂ゼミ)

- 三留 優衣 シャボン玉を通して化学を楽しむ
渡部 祥平 カラーユニバーサルデザインを使った化学実験
山中 亜美 腐敗反応における言葉の影響
遠藤 優志 燃料電池(Fuel cell)と環境教育
桜田 薫 飲み物における味覚・視覚・嗅覚の関係

春日 由香ゼミ

- 植村恵理奈 視点を活かした文学作品の読みの授業 ―小学校国語科の授業における実践から―
小嶋 千尋 国語授業のユニバーサルデザイン研究 ―文学教材を中心に―
須藤 涼 「学年別漢字配当表」の変遷と漢字指導の研究
田中 晶子 読書感想文指導の現状分析と指導法の研究
野口 隼 小学校における日記指導の検討 ―書くことが持つ意義―
的池優里香 小学校国語の授業開きと「屏の詩」 ―国語の学びを開く授業開き―
村田 涼 国語科授業におけるノート学習の実態と指導法
吉田 綾佳 平成27年度版小学校国語教科書におけるメディア・リテラシー関連教材の検討

後藤 道夫ゼミ

- 池田 昂平 労働と生活の思想
大庄司華菜 女性のキャリア形成について ―女性労働の課題―
加納 慶士 ブラック企業―ブラック企業の実態と対策―
笹川 皓紀 ブラックバイトの現状と課題
中村信太郎 フィンランドの教育制度と教師の関係 ―学力を育てる力教師の力―
宮下 大聖 ホワイトカラー・エグゼンプションの導入過程とその現状
柳町 和俊 職業教育の現状と実践例、職業教育の意義
吉田 真基 子どもの貧困に関する考察 ―貧困の現状と教師の関わり―
渡邊 健人 生活保護制度の現状と課題

佐藤 隆ゼミ

- 飯田彩咲実 学校と地域の在り方 地域に開かれた学校づくり
加藤 禪 「まちがい」が認められる教室づくり
久保田啓介 「学び」と「表現」の関係性を問う ―自由の森学園での教育実践を通して―
桑坂 杏奈 「対話」がもたらす児童と教師の信頼関係について

後藤 薫里 「本物の総合学習」を目指して
 小林 史佳 教師と保護者の関係づくりを軸とする学級経営 ―学級通信を通して―
 藤山 翔正 特別支援教育と子ども理解 渡辺克哉実践の本質に迫る
 宮崎 友希 外国語活動が日本の教育に与えるものとは

鈴木 有花 災害に負けない力を育む小学校家庭科教育の在り方について
 ―防災意識を高める教材づくり―
 柳 映志 保育園における肥満防止のための栄養教育
 足立 亮祐 児童の食生活及び運動指導に関する研究

清水 雅彦ゼミ

石川紗貴子 音楽による教科を超えたアプローチ
 ―ホイッスラーを端緒として―
 角田祥太郎 芸術の土壤スペイン
 杉尾 隆輔 日本の音楽教育と合唱について
 星野 奏子 沖縄音楽の構造
 宮崎 由紀 思想と音楽―なぜ歌うのか 音楽の持つ力―
 村松 千嘉 声がもたらす印象
 渡辺 朋子 音楽教育と人間形成の関係性

梶守 光恵ゼミ

青柳 桃 音楽をきく事と言語発達の関係について
 ―幼少期の音楽教育は子どもの言語発達にどのような影響を与えるか―
 雨宮 星尚 音楽教育の可能性を探る
 ―障害を抱える子どものための音楽教育―
 和泉 景子 リズムの重要性
 ―小学校音楽教育に関連して考察する―
 今村 香穂 シューベルトの音楽創造の背景
 ―シューベルトティアーデに焦点をあてて―
 久保 遥 ショパンの生涯と音楽を考察する
 ―19 世紀における歴史的背景から―
 五味麻弓美 ドビュッシーの音楽に与えた影響
 ―『映像』を中心に考察する―
 橋中 孝明 ベートーヴェンの生涯とピアノ作品
 ―ピアノソナタ第 26 番変ホ長調作品 81a『告别』の考察―
 宮腰 美帆 音楽が子どもに与える影響とは ―音楽と言葉（歌詞）から育まれる情操教育―
 武川明日香 リストの生涯とピアノ音楽
 ―12 の超絶技巧練習曲を中心に考察する―

添田 慶子ゼミ

村田 祐樹 苦手種目と運動能力の関係についての研究
 佐藤 真也 ウエイトリフティング競技の認知度に関する研究

平 和香子ゼミ

竹下 千尋 インクルーシブ教育の視点から考える中学校における食育プランの提案
 永井祐里恵 ランドセルに対する色意識とジェンダー観
 井上 正士 ハンドメイドマーケットの活性化に関する研究
 五明 桜子 学校現場におけるジェンダーバイアスの現状とこれからの課題
 御園生ゆかり 学童保育の現状と課題に関する研究
 神谷由佳子 小学校における性教育の現状と課題

高田 理孝ゼミ

大谷 昂輝 記憶に及ぼすイメージ能力と課題特性の関係性
 國本 主税 写真による第一印象
 ―相貌と近く特性の認知―
 小池 春香 人間関係における位置づけと自己開示の関係
 佐藤 大輝 自伝的記憶のパーソナリティ特性による分析
 千葉 俊輔 先延ばし行動と失敗行動の関連
 橋本真里南 文章記憶に及ぼす黙読と音読の効果
 牧野 桃子 文章の内容理解を促進する挿絵の条件
 森井美奈子 記憶検索が再生及び体制下に及ぼす影響
 横関 那月 過剰適応傾向のある大学生の友人関係の特徴
 横山 智絵 失敗経験の原因帰属が自己効力感に及ぼす影響

竹下 勝雄ゼミ

堤 美咲 文字と絵の関わりから生まれる想像力の展開
 ―絵巻物制作を通して―
 桑原友莉子 子どもの自主性を育む図工教育の指導法に関する一考察
 遠矢 誠幸 ボディビルダー鈴木雅の肉体美についての美術的観点からの一考察

田中 昌弥ゼミ

秋月 夕佳 廣瀬淡窓による咸宜園教育
 ―何故江戸時代最大の私塾となったか―
 生駒 恵里 外国にルーツをもつ子どもたちの教育
 ―海外との比較による日本の現状と課題―
 小川 司竜 追いつめられる新採教師
 ―子どもに寄り添えない現状―
 清水 啓哉 教育実習の現状と課題
 ―日本と海外の比較を通して―
 澤海萌々子 シュタイナー教育における教員養成と日本における教員養成の比較研究
 ―人間認識の観点から―
 藤井 駿美 小中一貫教育のあり方
 ―品川区の実践を中心に―
 饒平名知親 現場で子どもをどう理解するのか ―山崎隆夫実践と田中孝彦理論の比較と検討から―

筒井 潤子ゼミ

影浦 実佳 「消えた」子どもの実態とその背景にあるもの ―社会的養護の本質に迫る―
 小池紗央里 怒りの感情から見えてくるもの
 ―負の感情を前向きに捉えるには―
 小島 美華 愛着が子どもたちに与える影響
 ―愛着の必要性を教師の立場から考える―
 小林 美久 学校だからできる子どもへの福祉的支援
 ―スクールソーシャルワーカーの取り組みか

	ら学ぶ—
篠原 円香	「優しさ」のある教育
	—灰谷健次郎を手がかりにして—
中川 翔太	今を生きる「よい子」
	—教師にできる支援とは—
元井 毬絵	ありのままの子どもたちを認めて —保護者の立場に立つことで見えてくること—
山口まるみ	自分を見つめて
	—高垣忠一郎氏の自己肯定感に触れて—
鈴木 直樹	家族の力 —母と子の関係性に着目して—

堤 英俊ゼミ

岡本 萌	不登校を見つめなおす
	—当事者と非当事者の共生に着目して—
木村 有里	セクシャルマイノリティと学校教育
	—性と共に生きる—
清水万里子	求められる世代間交流
	—人と人との出会わせ方—
永田 咲	HAND TALK から学ぶ
	—教育現場で活かせること—
三浦 悠	知的障害スポーツからインクルーシブな社会の実現を考える
	—スペシャルオリンピックスを事例に—
村松 愛弓	子どもとことばを育む
	—豊かな自己表現をめざして—
八木 愛莉	豊かな心を育むための学級経営
	—いじめ・非行少年から学ぶ—
山崎 陽子	共生社会の実現に向けて —コンヴィヴィアリティを求める日々の営みから—

鶴田 清司ゼミ

足立 有紀	子どもたちの主体的な学びを生み出す問いについて
市川 怜奈	身近な経験と結びつける詩の学習
上原 成美	一人ひとりが安心して学べる学級づくり
佐々木明佳	誰もが参加できる話し合い授業
武田 舞	非言語的コミュニケーションの方法と有効性
新山 綾菜	アクティブラーニングにおける体験学習のあり方
三科 真由	小学校作文活動 書く意欲を高める作文指導について
山田 大輝	アドラー心理学を活用した学級経営及び授業の実践
渡辺 拓也	ICT教育の現状と可能性

寺川 宏之ゼミ

池田 忍美	折り紙と数学
戸河里長規	素因数分解について
中野 愛実	算数科の図形の指導について
中川 雄太	やさしい微積分入門
天野 美咲	なぜ0で割ってはいけないのか
岩下 祐一	初等教育において数学的な考え方を身につける活動
宮城 尚貴	算数教育の落とし穴

鳥原 正敏ゼミ

内田 亜美	図画工作から考える子どもの力を伸ばす評価について
高尾茉理乃	子どもの考えを引き出す図画工作
	—模倣と個性についての考察—
鷹野 実加	図画工作において大切なこと —ピーター・レイノルズの絵本と実践を通して—
藤木なつ美	ものづくりを通して心で通じ合うこと
	—新たな活動概念の提案と可能性—
渡井すみれ	図画工作で育む表現についての考察
	—低学年における色を中心とした活動—

中井 均ゼミ

石原 有理	「相模川」を地学の視点から総合的に教材化する —文献・資料まとめ—
笹木 優衣	「相模川」を地学の視点から総合的に教材化する —調査結果報告—
杉山 圭	「相模川」を地学の視点から総合的に教材化する —調査を基にした教材化—
植田 祐介	富士山を題材として防災教育の研究
	—富士市を例に—
大森 優	富士山を題材として防災教育の研究
	—都留市を例に—
斉藤さくら・佐藤 実紀・山崎 莉奈	石垣島の海岸砂の研究 其の二

西本 勝美ゼミ

織田 竜士	本当の学びを追い求めて
	—教育実践例からのアプローチ—
小宮山文香	子どもが育つ、地域が生きる
	—媒介としての“開かれた学校”—
社本 琴未	山村の生活と子どもの育ち
	—山村留学の取り組みに学ぶ—
宗野 幸紀	女性の労働と子育て
	—いま、求められる子育て支援—
竹内 琴美	子育てを地域で行う—PTAという可能性—
竹内 泰良	教育に現れる経済格差を埋める
	—「子どもの貧困」を認識する—
野村まどか	無縁社会から有縁社会へ
	—孤独死から考える人々のつながり—
松崎 哲	総合学科の可能性
	—自分探しの実践を通して—
村田 礼央	生活をつくる食の教育
	—自然に触れて力を育む—

平野 耕一ゼミ

生田 壮識	環境問題に意識を持つための、小学生が工夫してできる実験について
石野 萌実	小学生に向けた休暇中における理科の自由研究の指導について
小田ひかり	小学生に分かりやすい光の波長と色の関係性の指導について
川原 祐亮	再生可能エネルギーの現状と超小水力発電装置の開発

- 関澤 峻 小学校段階における放射線教育とその実践について
- 坪野 裕貴・長藤 祐揮 理科離れの現状と学生の理科に対する意識調査から考える、理科離れを改善するための方法について
- 山岸 鴻太 児童が日常で疑問を抱く理科的現象に対して、例えを用いて分かりやすく回答することができる教材の研究

藤本 恵ゼミ

- 宇治橋さおり 青少年読書感想文全国コンクールから見る児童文学と国語教育
- 柴崎 健吾 星新一論 ―作品から探る未来予測力―
- 柴田 雪菜 米沢穂信『儚い羊たちの祝宴』に描かれた女性
- 中川 弥生 近現代児童文学作品と〈狐〉
- 秦 浩斗 森絵都の描く世界―『カラフル』を中心に―
- 渡邊 綾那 時雨沢恵一「キノの旅」シリーズの特色 ―寓話性と不条理性を中心に―
- 渡辺 公太郎 『太陽の子』『兎の眼』を読み解く ―灰谷健次郎の目に映る子どもたち―

別宮有紀子ゼミ

- 川村 修央 光環境の違いがハクサンシャクナゲの繁殖、個体数に与える影響
- 佐藤真菜実・新平 絵里 葉の濡れやすさは種によって違うのか ―気孔との関係―
- 芹沢 尚美・徳田 雄亮 富士山精進口登山道付近に生育するテンの食性 ―3年間の軌跡と種子散布者としての役割―
- 柴山 莉奈・吉澤 侑 サクラの葉の蜜腺によるアリの誘引は害虫の駆除に寄与しているのか

柳 宏ゼミ

- 大澤 里奈・茂木 美咲 バレーボール競技におけるレシーブ能力の研究 ―移動距離と移動スペースに着目して―
- 大附 奈央 バレーボール競技におけるブロックアウトスバイクの動作分析研究
- 栗林 恭平 サッカーのトレーニングに関する研究 ―リフティングボールを用いて―
- 近藤 綺音 バレーボールのフローターサーブに関わる要因についての研究
- 佐藤 真奈 バレーボール競技におけるレシーブ動作の分析研究 ―強打に対するディグの場合―
- 佐野 千帆 生涯スポーツに対する動機づけの研究 ―社会人の場合―
- 橋本 幸恵 教わる側からみた運動部指導者勢力について ―高校女子バレーボール部員の場合―
- 山崎 菜央 家庭婦人スポーツに関する研究 ―ママさんバレーと他種目との比較―

山崎 隆夫ゼミ

- 福井 成美 今を生きる子どもと「アンパマン」
- 開道 美優 「良い子」の生きづらさを考える
- 三輪 広樹 いま求められる生活指導とは ―ゼロトレランス教育の検討からみえるもの―
- 高田 裕子 発達障害児の子どものいる通常学級で共に生きる喜びをどうつくるか
- 早川 真帆 不登校の問題をどう見るか ―幾人かの事例から考える―
- 佐野 真帆 「荒れる」子どもをどう見るか ―心の居場所―
- 川口 桃奈 本との出会いが子どもに与えるもの ―本が持つ力―
- 渡辺 葵 荒れる子どもの心を考える ―思春期を中心に―
- 寄井田裕美 今日の教室の困難と子ども理解の大切さ

国文学科 平成27年度卒業論文題目

上代文学 鈴木 武晴ゼミ

- 浅野 瑛美 ヤマトタケル物語の悲劇性
- 大辻つばさ 日本人と犬
- 小笠原ゆりえ 「エミシ」と呼ばれた人々
- 榊原 菜央 黄泉の国からみる日本人の死生観
- 佐野 愛果 『万葉集』における「花」
- 徳地 怜奈 日本文学の桃の始まり

- 富田 夏実 『日本書紀』に見る上代文学における人魚観
- 野口 紗希 大伴家持の歌の変化
- 林田 章子 上代における弓
- 古屋明日香 古事記神話 ―迦具土と伊耶那美の対比―
- 堀 菜月 『万葉集』に詠まれた神
- 八十田 雅 日本神話における水の神 ―タカオカミ神を中心に―
- 山田 彩花 「結」の文学と文化

中古文学 長瀬 由美ゼミ

大関 和佳	『讀岐典侍日記』上巻・堀河天皇崩御の叙述について
尾崎 歩	『源氏物語』紫の上の少女時代について
酒井 瞳	『落窪物語』道頼についての考察
進士 優夏	『源氏物語』と「長恨歌」
中島あずさ	『竹取物語』における「生」と「死」
八木 緑	『源氏物語』光源氏の出家観
渡邊 優美	『うつほ物語』における琴
間部 靖子	『紫式部日記』の主題

中世文学 佐藤 明浩ゼミ

下地 慶知	『Hojoio-ki』論 —英訳『方丈記』から見えるもの—
芦沢 怜美	『宇治拾遺物語』の菩薩話の傾向 —他説話集との比較から—
秋本 菜月	新古今和歌集における「雪」
野中なつみ	『今昔物語集』における「人を噉らう鬼」に関して
堀井 美歩	『たまきはる』の作者の執筆意図について
本田 奈々	『愚管抄』における「顕」と「冥」

近世文学 加藤 敦子ゼミ

芦澤麻友子	大人のための赤本
三枝 弥生	「紅梅千句」振り仮名の考察
中島 咲	『好色五人女』における俳諧性 —西鶴は“八百屋お七”をどう描いたか？—

近代文学 古川 裕佳ゼミ

刑部 愛香	深沢七郎『笛吹川』論
加藤 知佳	小林多喜二「暴風警戒報—困難な下半期—」論 —作品に表れる女性観を中心に—
菊地 翔	坂口安吾『不連続殺人事件』論 —盤面の駒と秩序—
久米 成美	芥川龍之介「奉教人の死」論 —宗教及び性別から見る「ろおれんぞ」—
平澤慎奈子	山田風太郎『太陽黒点』論
細矢 萌	内田百閒「件」論
渡邊明日香	夢野久作「押絵の奇蹟」論
春日万里子	宇野千代「おはん」論
熊木 葉子	江戸川乱歩『押絵と旅する男』論

近代文学 野口 哲也ゼミ

小松 実嵩	『春の雪』論 —愛と死と優雅—
野村 勇馬	ネズミと市民、それぞれのパニック —開高健『パニック』論—
畔上 幸子	遠藤周作『海と毒薬』論 —神の諸相—
石田 諒	高村光太郎『智恵子抄』論 —「自然の象徴」としての智恵子像—
石橋 悠	寺山修司『毛皮のマリー』論 —マリーの支配—
板谷 美咲	武者小路実篤『友情』論 —友情と恋愛—
大草 三樹	谷崎潤一郎「少年」論

荻田 李紗	—少年達の遊びを中心に—
北浦麻衣子	堀辰雄「風立ちぬ」論 泉鏡花「眉かくしの霊」論 —不安定な舞台に現れる物語—
國府 真弓	坂口安吾「桜の森の満開の下」論 —喋る首と女たち—
小林 千絵	鈴木三重吉「三月七日」における連想・夢想と恋愛観
佐藤 元気	村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』論 —「心」の定める道—
寺中 夏姫	葉山嘉樹『淫売婦』論 —人間愛とその語りについて—
中村 美優	夢野久作『瓶詰地獄』論 —小説における読みの多様性—
藤原 直道	芥川龍之介「藪の中」論 —藪の中の嘘と真実—

近代文学 阿毛 久芳ゼミ

酒井 敦子	「押絵の奇蹟」論—狂人の目から覗く世界—
高橋 千尋	立原道造・詩の設計図 —詩における建築的なもの—
板花 怜美	内田百閒『冥途』の幻想世界
太田 緑	宮部みゆき『龍は眠る』論
太田 里奈	宮本輝「星々の悲しみ」論
小尾 千晴	漱石が描く「高等遊民」 —『彼岸過迄』を中心に—
折戸祐貴子	八木重吉『秋の瞳』論
久島優貴子	宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論
榊原 千恵	谷川俊太郎『モーツァルトを聴く人』論
新野 遼介	藤沢周平「蟬しぐれ」作品論 —藤沢周平を作ったものと『蟬しぐれ』の女性たち—
別符沙都樹	小川洋子『猫を抱いて象と泳ぐ』論
辺春 紫乃	芥川龍之介「羅生門」論
本江 琴	三島由紀夫『天人五衰』論
松岡 茜	中島敦「古譚」論
百瀬 糸乃	「青森挽歌」論
山下 未香	島本理生『シルエット』論 —影の中に見えるもの—

近代文学 新保 祐司ゼミ

青山愛里沙	「芥川龍之介『蟹気楼』論」
田近 良奈	三遊亭圓朝の生きた明治
伊藤 響	尾崎翠作品と映画
大沢真樹子	「文学における富士山の描かれ方について」
清水 翔吾	田山花袋論
杉浦 博紀	『坂の上の雲』に見る司馬遼太郎の「日本人観」
瀬戸口奈々	夏目漱石の女性観・恋愛観について
樋口 翔太	夏目漱石『夢十夜』について
水澤 里香	手塚治虫作『陽だまりの樹』から見る明治の精神
山田 茜	殉死と二人の文豪
長谷部ちなつ	夏目漱石『それから』
目時瑠奈子	—三千代の自我について— 『銀河鉄道の夜』について

古代語 加藤 浩司ゼミ

伊藤 茜 動詞「飽く」について
 宇野奈那子 古代語における「気」について
 奥村 祥子 動詞の終止形重複形と連用形重複形について
 後藤 萌子 口合と地口の規則性について
 橋田 尚志 形容詞「おもしろし」について
 三森 優也 呼応の副詞「あへて」「おほかた」「さらに」「たえて」「つゆ」「よに」について

近代語 鈴木 芳明ゼミ

藤田 晴也 副詞的「超」の出現について
 往藏佳菜子 現代小説における女性の話し言葉の文末表現
 幾見 紫織 格助詞「に」と「へ」
 一動詞から見る使い分け—
 折田 知之 日本語表記の「ゆれ」—手書きとワープロ
 のかな漢字変換を中心に—
 桐生 実佳 群馬県太田市のアクセント
 齋木かりな 色彩語メタファーによる意味喚起
 杉田真由美 千葉県南部に見られるk音脱落現象の現状
 杉本 花菜 接続詞・副詞に見られる話しことばと書きこ
 とばの混用
 高田 優衣 若者の敬語に対する意識と誤用の実態
 田島 新菜 外来語とその言い換え語の認知度と使用実態
 谷口つるぎ 終助詞「ね」の情報共有性
 堀内 祐希 新聞の見出しに見られる略語について
 松田 涼葉 関西弁の他地方出身者への浸透
 宮下 穂波 長野県中川村の方言敬語
 山田 莉乃 助数詞「つ」の使用範囲拡大について

漢文学 寺門日出男ゼミ

高橋 美江 諸子における動物の寓話
 石井 成美 伊藤仁斎の「怨」解釈
 福田亜里沙 佐藤一斎の教育観
 細矢 芽 陸機の曹操観

教育学 牛山 恵ゼミ

中 涼 日本語教育とコミュニケーション
 秋山 真唯 「とりかへばや物語」から学ぶ古典学習指導
 天野 美加 『星の王子さま』の教材研究
 雨宮 恵理 中学校国語教材の学習指導についての研究
 —導入部分の授業の工夫—

石川 芹菜 文学教材から読み取る家族観
 —小学校・中学校教材を中心に—
 井上 葵 災害と国語教育
 岩崎 久司 中学校国語教科書における文学作品の教材研
 究
 —「読み」を重視した授業づくりのために—
 岩見 真由 「中学国語科における『話し合い』教材」
 小川 礼 現代文から見る高校国語教育の意義
 佐藤 望未 「重松清作品における教材性」
 嶋崎 春奈 日常生活に生かすコミュニケーション能力と
 子どもの言葉
 立花 大樹 国語教育におけることば遊びの活用
 中山 幸恵 「子どもの貧困と国語学力問題」
 渡辺 佑 「盆土産」(三浦哲郎)の教材価値
 牧 沙樹 「読むこと」教材から学ぶ「食」の意味

日本文化 菊池 有希ゼミ

石野 葵 有吉佐和子『ぶえるとりこ日記』論
 —作中人物の「異国/自国」意識を中心に—
 大嶋 美緒 グラフ雑誌としての『アサヒグラフ』
 近江 建心 江戸川乱歩とエドガー・アラン・ポー
 —処女作『二銭銅貨』をもとに—
 片山 航 映画『グスコブドリの伝記』は文学的意義
 を持つか —原作『グスコブドリの伝記』
 との比較を通じて—
 菊池 柚衣 吉本ばなな『キッチン』における食の意味と
 役割
 後藤 杏美 竹久夢二が草にこめた思い
 —その詩文を中心に—
 章 瑋 芥川龍之介『魔術』論
 —「欲」の現れ「夢」という装置—
 豊福智菜津 あさのあつこの小説『バッテリー』と映画
 『バッテリー』の比較研究 —「言葉」を獲
 得する物語から「家族」としての物語へ—
 中島 悠花 金子みすゞの自然詩における家族のイメージ
 —花・月・星の詩を中心に—
 中野 文也 太宰治と〈笑い〉
 —『人間失格』にみる道化の真実—
 橋本 亮佑 筒井康隆作品における夢
 —『夢の木坂分岐点』『パブリカ』を中心に—
 樋郡 菜穂 大島弓子論

英文学科 平成27年度卒業論文題目

大平 栄子ゼミ

雨宮 由佳	少女の女性としての生き方の変遷 — <i>Peter and Wendy</i> と <i>The Clever Princess</i>
小笠原絵菜	「第二の母親」としての家事使用人 — <i>The Secret Garden</i> と <i>Mary Poppins</i> シリーズ
角 このみ	<i>The Happy Prince</i> における翻訳の差異
門部沙耶香	ロンドンのコーヒーハウスから見るカフェの 歴史的背景
坂本 満喜	世界で必要とされる宗教教育
佐藤 文香	<i>Monsoon Wedding</i> から見るヒンドゥー教の結 婚観
篠原 綾子	<i>Shirley</i> と <i>Jane Eyre</i> から見るシャーロット・ ブロンテの結婚観
鳥澤 朱乃	長編ディズニーアニメーションにおけるジェ ンダー表象の変化と歴史
前田 祥子	<i>Water</i> にみる寡婦の生き方
丸山 桂奈	<i>Lean In</i> にみる女性の活躍
宮崎 真帆	<i>The Little Prince</i> にみる欧米的精神と日本的精 神

加藤めぐみゼミ

長谷川直美	『ダロウェイ夫人』における手の効果
青山 紗己	『ハリー・ポッター』における階級の在り方
新井 慎弥	Pink Floyd <i>The Wall</i> が描き出す「人類の悲劇」
市村 早希	少女から大人へ —成長物語としてみる『不 思議の国のアリス』
稲葉 ゆい	<i>Pygmalion</i> における階級上昇の可能性 —イライザの葛藤と成長
奥山 佑生	『土曜の夜と日曜の朝』に見る労働者の階級 意識
川村菜那央	『わたしを離さないで』と承認欲求 —ロストジェネレーションとクローン、シス テムと個人
熊谷 藍	まなざしから導けるサロメの人間味
齊藤 友希	ティム・バートンの世界に見る「死」と「再生」
仁科 亮太	菜食主義の実態
安川 知里	<i>Wuthering Heights</i> から『嵐が丘』へ —古典翻訳における作品解釈の変容
山崎ひかり	<i>Pride and Prejudice</i> をめぐる文化産業
吉岡 明美	<i>Mrs Dalloway</i> における戦争の影

竹島 達也ゼミ

伊志嶺明子	Identity Differences Among the Japanese American Generation
川口 晴奈	August Wilson の3作品から見るアフリカ系 アメリカ人のアイデンティティ
秋林 恭祐	不条理演劇とそれが享受された社会背景との 関係性

飯島 智美	アメリカ演劇に見る民族性と「アメリカ人」 —多様性一つ一つがアイデンティティ—
榎本 秋奈	心理学的視点でみる Eugene O'Neill
川上 賢春	大恐慌が示したアメリカの実態とアーサー・ ミラーの救済
日下 有紀	現代アメリカ演劇に描かれるキリスト教の不 寛容
齊藤 卓也	オーガスト・ウィルソンの劇作品から見る黒 人文化
榊原 有希	9.11 後の演劇に見られるアメリカの内向性
鈴木 愛莉	ヒスパニック系作家の三作品からみる、ヒス パニック系のイメージと現状、そのアイデン ティティ
千賀あやめ	日系アメリカ人が抱えた苦悩 —Philip Kan Gotanda の演劇作品を通じて—
御宿 優奈	Holden の揺れる心と求めた「光」 —通過儀 礼的役割を果たす <i>The Catcher in the Rye</i> —

儀部 直樹ゼミ

犬戸 望	ウィリアム・パトラー・イエイツ —鷹の井戸について—
轟 綾乃	Second Language Education
青柳 西安	American People in the Twentieth Century in <i>Ordinary People</i>
飯室 有沙	帰化と人種差別
石津健太郎	<i>Cat's Cradle</i> から見る現代社会の文化とモラ ル
田中 嘉	海外ドラマから見るアメリカ文化
永田 真子	『日の名残り』における表現の技法
原 梨紗	赤毛のアンにおける家族の形
平澤 真穂	緋文字が照らし出す、女性の様々な側面
深澤慧美那	日本と英語圏のホラー映画
福島凜太郎	『グレート・ギャツビー』を読んで
宗像 優佳	『ハックルベリー・フィンの冒険』に見られ る自然と自由
室井 未来	ディズニープリンセスの魅力

鷲 直仁ゼミ

岡田 健吾	首を持つ少女 サロメ —ファム・ファター ルへの変容と人々の受容—
河野 智妃	19世紀イギリス絵画についての考察
徳永 愛子	19世紀イギリス絵画における女性の美 —ヴィクトリア朝の繁栄で得たもの—
根市 佑也	ホイットラーとゴッホの絵画から見るジャポ ニズムの影響・比較
深谷 智子	『自負と偏見』にみる18世紀イギリスの女 性と結婚
堀田 理央	魔女狩りからみるイギリス絵画 —魔女が絵画に与えた影響とは—

洞澤 優紀	《オフィーリア》における画家による描写表現の相違
宮下隆太郎	ラファエル前派 —P.R.B. 社会と画家を通じて—
森 幸子	イギリスを代表するアーティスト・ピートルズについての考察
良知真悠子	映画 007 シリーズにおける文化的特徴の推移
柳光 柚佳	死刑制度と宗教

中地 幸ゼミ

雨森 史子	<i>Beloved</i> における愛とアイデンティティー
鈴木 優花	ディズニー・プリンセスにみるジェンダーとその変化
武井美楠子	<i>Nemesis</i> に見る母娘と愛の関係
細川 千晴	映画『チート』と『散り行く花』における人種とジェンダー
奥野 宏美	Nella Larsen の <i>Passing</i> におけるアメリカの人種と同性愛について
鎌田 朝子	Between American and Chinese Cultures: A Study of <i>On Gold Mountain</i>
坂本 萌	<i>Obasan</i> における発言と沈黙 —Emily, Ayako, Naomi の違いが生じた背景
篠原 真由	ガーデニング文化から見るイギリス社会 —『秘密の花園』を中心に
大道 晴佳	ヴィクトリア朝キッチンから見る中産階級女性の社会進出
服部 麻由	People in Postcolonial India: Identities and Dilemmas in Kiran Desai's <i>The Inheritance of Loss</i>
早川真理子	日系アメリカ人と他民族との関わり —シンシア・カドハタの『草花と呼ばれた少女』と『きらきら』について
松本 麻依	ヨシコ・ウチダの作品に込められたメッセージ — <i>Journey to Topaz</i> シリーズからの考察—
宮田 真澄	なぜ Pecola は悲劇のヒロインとなってしまうのか — <i>The Bluest Eye</i> における Claudia と Pecola の比較

今井 隆ゼミ

奥田想一郎	The Origin of Asian Languages and Their Properties
-------	--

福島佐江子ゼミ

高井 柚花	謝罪表現に関する一考察—日英を比較して—
谷口美奈代	ポライトネスと間接依頼表現
田村 遼司	Japanese EFL learners' pragmatic failure in request situations
中家 早貴	日英の依頼表現—ポライトネスの観点から—
長谷部稜子	ビジネス社会における謝罪表現
服部 亜純	依頼のストラテジーに関する一考察
朝倉 瞳	感謝表現に関する一考察
飯窪 真由	配慮表現とポライトネス
小笠原葉菜	話者交替に関する一考察 —力関係に焦点を当てて—
篠原 啓明	配慮表現に関する一考察 —ポライトネスの観点から—

清水 圭介	あいづちに関する一考察 —日本語と英語の会話分析を通して—
高宮花里夢	絵記号に関する一考察—語用論的観点から—
千野 彩佳	謝罪に関する一考察
長谷部義樹	ポライトネスと敬語に関する一考察
藤波 拓真	Japanese English Learners' Pragmatic Failure

西出 公之ゼミ

阿佐 聡士	英語のことわざの研究
池田 有香	学習者コーパスの可能性
笠原 龍二	ESL における児童英語活動用テキストの語彙
木村 草太	日米における方言の特徴と今後の展望
坂本 理沙	コーパスに基づく文体研究 —Jane Austen, <i>Pride and Prejudice</i> を対象にして—
田中 亜子	アメリカと日本 SNS の使われ方の差
堀内菜津実	ホスピタリティ業界への人材育成

三浦 幸子ゼミ

小島 彩奈	Considering Oral Interpretation in L2 Instruction
相澤 雄介	Exploring the Effects of L2 Learners' Educational Backgrounds on their Perceptions of Recasts and Uptake
荒井 康耀	Exploring Prospective English Teachers' Perspectives of Motivational Strategies
小原 優子	Effects of Shadowing on L2 Listening
小島 明陽	Bilingual Education at home: The Advantages and Disadvantages of Bilingual Children whose Parents Have a Different First Languages
今野 翔介	Exploring Significance of Teacher Talk and Teacher Questioning in L2 Classroom
篠田 真星	Exploring the Effects of Using Picture Books on Learning Letters in EFL Elementary Classrooms
樋口はる菜	Effects of Written Corrective Feedback on Improving Accuracy of L2 Grammar
二村 啓介	An Analysis of Junior High School English Textbooks Focusing on Writing Activities
宮里 春菜	Exploring EFL Learners' Use of Compensatory Strategies in Describing Japanese Culture
吉田 千鴻	Exploring Cooperative Language Learning in Junior High School English Education
澁谷 拓	Considering a Rubric and its Reliability for Discourse Writing Assessment

奥脇奈津美ゼミ

小藤 晃裕	Assessing the Effectiveness of Vocabulary Tasks
十河さくら	中国人日本語学習者による「テイル」の習得に関する研究
林 優希	日本語学習者のカタカナ語の使用と意識について
阿部 拓磨	Working Memory Capacity and Its Relation to L2 Reading ability and Proficiency
乾 理子	初等教育における聞く活動・読む活動の重要性
金丸 綾花	カタカナ英語の認識と理解についての一考察
河合 碧	How Topic Selection Influences L2 Speaking Fluency

平賀 真生	Lexical Access of L2 Mental Lexicon
古屋 香純	The Effect of Pictorial Annotation on Incidental Vocabulary Learning
前川 恭祐	日本語—英語間にみられるストループ効果の考察
山本 麻央	童謡のオノマトペ —幼児と児童—
横山 俊樹	Lexical Process Speed and Vocabulary Size of Japanese EFL Learners

Hamish Gillies ゼミ

尾崎 康太	How to Maintain Student's Motivation in the Language Classroom
坂本 武信	The Great English Divide
中岡 摂子	Investigating Personality Shift Experiences and Factors: The case of Japanese Speakers of English as a Foreign Language
深澤 映帆	Coffee Culture in Britain
水原 真菜	The Tales of Beatrix Potter: Exploring the Dressing up of Peter Rabbit
安中こころ	The Cultural Differences between Britain and the US in terms of the Original "Winnie the Pooh" and that of Disney
久保 文也	Consideration of English Classes from the Viewpoint of SLA

杉山 詩織	Sociocultural Aspects of Motivation that Cause Differences in English Proficiency between Japanese and European Learners
角屋 風華	Comparing the Future of Working Women in both Britain and Japan
中村 恭子	Immigration in the U.K.: Inequality at Work and School
長谷 部香	Using J-Pop Songs to Motivate Japanese Learners of English
花木 壮介	How Japanese Students are Motivated in Second Language Acquisition; Considering Competence and Autonomy from the View of the Interdependent-self Construal
元村 純瑛	Educational Psychology and Motivation for Language Learning: A Case Study
渡邊 紗英	Affective Factors in Second Language Learning
渡邊 真央	What is English Education for Japanese?
小室 颯都	Judging Personality by Blood - type in Japan: Effects on Society and Daily Life
堀 真衣	The Affective Filter: Consideration of Social Skills in Multi-cultural Symbiosis in the Era of Globalization

社会学科 平成27年度卒業論文題目

現代社会専攻

現代史 菊池 信輝ゼミ

和泉 愛花	「島ぐるみ」闘争
内山 真太	現代政治とヘイトスピーチ
小川 歩	長野県における満州移民政策
奥田 翼	震災におけるラジオ報道の役割の変化
小野寺聖貴	後藤新平から見る大正帝国主義
加藤 美咲	教育格差是正の取り組みの歴史と今後の課題
歌門 武蔵	大都市制度の歴史と課題 —大阪市を中心に—
岸本 晴朗	祭からみる地域社会 —山梨県上野原市秋山無正野念仏の事例から—
北原 拓弥	「芙蓉部隊」と藤枝基地
渋澤 葵	御柱祭の続く理由と諏訪地域の人々との関係
志村 穂	国立大学の現状と今後の展望
鈴木 一輝	少年犯罪の抑止力
徳永明日香	長野オリンピックの成果と課題
成田 千紘	日本型新聞の現状と問題
松永 章吾	大日本帝国陸軍の第一次大戦後の国防構想 —その政治的構想と帰結—
山本 豊	教育史考—これからの教育について考える—
山田 千晴	高度経済成長期における観光志向

生涯学習論 畑 潤ゼミ

植松 奏恵	現代の子ども社会の「いじめ」問題を考える ～共同で人間性を育む「教育実践」という視点を軸にして～
小幡 泰之	共同学習における成人学習支援者の役割とは何か —社会的排除に対する社会教育学的アプローチ—
表 咲良	子育て・教育の「常識」を問い直す —自由の精神と「対話」思想の考察—
片本 匠	高校野球にひそむ勝利至上主義についての考察 —スポーツと教養・教育との関連に関する基礎的研究—
加藤 崇矢	青年期の子どもの道徳性・社会性の育成 —特別活動・キャリア教育の教育的実践—
佐藤佳太郎	社会教育の本質と公共性の原理に関する考察 —社会教育行政「解体の危機」にあたって—
仙波 綱兵	博物館の本質と教養教育 自発的な学びと地方における博物館のあり方
西田 純也	スポーツと人間形成 ～スポーツのあり方と良さに注目して～
宮地 翔	ジャン＝ジャック・ルソー著『エミール』と現代社会の教育 —「自然」と「自由」に目を向けて—

社会哲学 黒崎 剛ゼミ

- 稲垣 周杜 リプロダクティブ・ライツについて
 金城 周大 V.E. フランクルの思想と現代的価値についての考察
 桑原慎太郎 音楽の哲学における、音楽と感情との関係
 桜井 勇輝 スポーツ概念史からみるスポーツマンシップイデオロギーの誕生と変遷
 砂場弘太郎 日本における倫理的消費の普及について
 大尾 怜 「自分探し」ーバックパッキングにおけるアイデンティティの刷新とはー
 萩谷 雄太 日本人とは何か 震災後の日本人の行動が海外で称賛されたのはなぜか
 平島 久美 日中韓の歴史教育
 渡辺 香穂 一日中韓共通の歴史教科書はつくれるのかー戦時における非戦闘員の殺傷問題について

日本経済論 糸井 重夫ゼミ

- 岩崎 香織 訪日旅行と日本
 大沼 真也 日本の好景気と「失われた20年」からの脱却
 小林 誠矢 日本の貧困から子供の貧困を考える
 金野 菜 貧困の再生産を中心に
 栗原市の観光業の課題
 ～エコツーリズムの可能性～
 施 国棟 日本の労働生産性の現状と課題
 中村 貴弘 郵政民営化の与えた影響
 新田 純也 日本の公的年金制度における世代間格差の分析と是正
 細口 将吾 平成 25 年度税制改正による相続税・贈与税の見直しに関する一考察
 陸川 裕貴 若者の雇用状態による恋愛、結婚離れが与える経済的影響

現代社会論 田中 夏子ゼミ

- 太田 光英 現代日本における若者の離職率の高さの原因と問題解決の展望
 小澤 巧 交通弱者の暮らしを支える公共交通の現状と課題
 小島 名緒 新たな都市計画と地方商店街の活性化について
 柴田 駿 市民社会形成過程におけるシティズンシップ教育の可能性と課題
 高橋 稔史 地域博物館とその活動について
 武田 岳 地方消滅論をめぐる地域の受け止めと対応・対抗の動き
 辻 来夢 一人暮らし高齢者の生活の質を支えるコミュニティ作りの課題
 坪岡 拓也 不登校問題における学校外からの取り組み
 吉村 公貴 地域の防犯体制のあり方
 ～安全で住みやすい街づくりの現状と課題～

地方自治論 安達 智則ゼミ

- 上矢 元気 日本の教育格差の現状と課題・今後の在り方
 ～北欧諸国との比較より～
 栢野 翔汰 景観の美の空間まちづくり研究
 ～倉敷市と真鶴町を事例として～

- 小松 聖矢 地方分権改革のはじまりと終焉
 島崎 達也 日本の税制問題と格差
 下川 智史 子どもの発達のための学校自治と地方自治
 高柳 伊吹 社会教育施設「指定管理者制度」の問題解明
 一住民自治の力で公共性を回復できる
 寺田 仁志 木造密集地域の修復型保存のまちづくり
 菜花 大輔 原発事故からの打破
 西 飛雄馬 海洋文化から見た奄美大島と地方自治
 錦 和美 豊かさのあるまちづくり
 ～ニュータウンの過去・現在・未来～
 福田 有花 近代日本における島嶼と地方自治
 前川 裕二 潜在能力を活かした地域再生研究
 松野 宙希 地域自治体産業政策構想
 ～商店街と大型店舗の現状分析を通して～

社会法 常森 裕介ゼミ

- 青野 景 母子家庭の現状と課題
 植松 楓 Jリーグの発展と地域振興
 浮島 美緒 子どもの貧困と教育を考える
 岡本 怜弥 少年法の時代変遷と現状
 一情報化社会と少年保護ー
 久野 晴菜 地方の公共交通機関の現状
 小高 理沙 非正規雇用者の働き方及び賃金についての検討
 末松みなみ 安楽死と緩和治療
 一末期における死のありかたについてー
 田熊 一光 戦後日本の労働運動と現在の労働運動の課題
 について
 土田香夏子 東日本大震災における福島原発事故に対する福祉と復興について
 濱田 大樹 日本の食料問題の安定性と安全性について
 日高香菜美 いじめの防止について
 舟生 葉 パワーハラスメントの救済についての考察
 増田 遥 日韓女性労働の比較
 山本 光洵 生活保護制度の現状と課題についての考察

企業経営・労働とジェンダー 野畑眞理子ゼミ

- 石丸 巧 自治体の少子化対策の現状と諸課題
 熊城 弘晃 観光資源を活用した持続可能なまちづくり
 小林 直貴 福利厚生歴史的考察
 柴 玲央奈 ジェンダーの視点から考察するワークライフバランスの現状と課題
 志村 尚通 格差と教育
 正田 千晶 企業における CSR 活動の現状と課題
 武田 七海 山梨県における男性の育児参加の特質と課題
 一国内都道府県間比較の視点からー
 中国 拳都 教師の長時間労働について
 長坂 知美 男女賃金格差とコンパラブル・ワース
 野沢 知生 派遣労働者の現状と諸問題について
 若杉 大気 日本におけるワーキングプアの現状と課題

憲法 横田 カゼミ

- 大胡田 絢 障害者の権利と憲法 25 条
 大室 陽人 集団的自衛権について
 稲見 優貴 日本国憲法と平和について
 一集団的自衛権と安保法制を考えるー

岩田 あゆ 「政府言論 (government speech)」とその
統制
荻野 伸哉 ヘイトスピーチは表現の自由と言えるのか
—表現の自由の本質とは—
瀬戸口優樹 集団的自衛権と日本の安全保障
小田慎一郎 表現の自由とヘイトスピーチ
武市 鮎奈 モデル小説における表現の自由とプライバ
シー
根井 尚輝 安保法制と立憲主義
村上 龍太 表現・言論の自由と報道
—報道が萎縮しないためには—

環境・コミュニティ創造専攻

環境社会学 平林 祐子ゼミ

池田ことみ 観光ボランティアガイドが地域住民と関わる
意義 —「地域学習」に焦点を当てて—
奥村 奈々 環境保護活動への関心の向上 —新宿御苑に
おける取り組み、来園者を通して—
川向 徹 観光地における地域住民と観光客間の「聖地
巡礼」に対する意識ギャップについて
竹井耕太郎 新参×古参によるマチづくり
—東京都台東区蔵前を事例に—
新美 達也 東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力
発電所事故以前と以後における原発輸出政
策の変化について
—原発輸出の歴史に着目して—
長谷川紘也 日本の木材で作った木製バットの復活へ向けて
—野球界が林業の活性化に貢献できる可能性
の考察—
山本 麗衛 若者は何によって食意識をつくるのか
—食生活と放射性物質に関する聞き取り調査
から—
李 光武 中国都市生活ごみにおける分別意識問題につ
いて —中国大連市を中心に—

環境教育 高田 研ゼミ

奥山 勢二 岩手県大船渡市における災害支援の現状と課題
北村 琢磨 和歌山県御坊市園地区における自主防災の現
状と課題
近 知夏 天津司舞における人形の民俗学的意義 —甲
府市天津司神社・鈴宮諏訪神社の事例から—
坂井 大志 宮沢賢治の教育実践活動贈与という観点から
『羅須地人協会』を再評価する
佐川 里美 自然体験活動における環境教育との関連性
—藤沢市を事例として—
長濱 有希 『学びあい』の手法と今後の展開
—佐藤学と西川純の手法から—
禰津 匡人 地域に作る子どもの遊び場の意義
—都留市を事例に—
本田 義智 熊本県における都市農村交流の可能性
—阿蘇地方を事例として—
牧野 宏亮 浜松市の高等学校における環境教育の事例検
討とピオトープの設置状況
松浦 夏純 平和の教育を考える

～未来の子どもたちに平和な世界を～
養父大二郎 小学校教育における主権者教育の実践と課題
山名 花苗 未来につなぐ —復興教育の現状と発展—
吉原 南海 ユネスコスクールにおける『地域学習』の研究

地域環境計画 渡辺 豊博ゼミ

岡田 知大 国産材の利用拡大という視点から考える森林
の維持・管理について —北都留森林組合と
南都留森林組合を事例にして—
小佐野ゆきえ 山梨県における森林環境税の今後の課題と展望
—高知県との比較をもとに—
加々美汐里 祭りを通した地域活性化の取り組み —信玄
公祭り・小田原北條五代祭りを事例として—
木村 仁紀 適応指導教室における連携の現状と今後への
提案
小林 和博 商店街の活性化への取り組みと今後の課題と
提案 —全国商店街への取り組みを、岡山県
美作市三倉田商店街を事例として考える—
小林 勝成 静岡県富士市における農作物への鳥獣被害の
現状と対策
—富士山麓市町村と伊豆市を事例に—
近藤 圭 自然体験活動が参加者に与える影響と今後の
可能性 —環境出前講座をもとに—
島田 裕之 富士箱根伊豆国立公園の現状と今後の管理保
全の在り方 —米国国立公園と比較して—
早川 涼介 学校給食における地産地消
廣瀬はづ紀 NPO 団体の今後のあり方について
—甘利山倶楽部とグラウンドワーク三島を事
例にして—
山下 瑠己 静岡県浜松市の移住促進における現状と課題
—静岡県内の市町村を例に—

地域社会論 田中 里美ゼミ

赤澤 実希 非営利組織における高齢者福祉事業
—農協の場合—
北村 彩乃 暮らし・食の自治を育む、その意義と課題
—食への手間を惜しまない人々のとりくみ—
中込 拓真 地方自治体における地域の活性化
井出 貴洋 日本における自動二輪車の位置づけと今後の
展望
遠藤 寛和 障害者の就労支援
—静岡県富士宮市の事例をもとに—
川口 惇 ユニバーサルデザインのまちづくり
菊池 宏貴 遠野市の町おこし —地域資源を活かす—
武 大右 再生可能エネルギーを利用した地域活性化
永井 祥紘 障害者福祉の将来性について
奈良 昂輝 持続可能な観光とまちづくりに関する考察
—山梨県大月市猿橋町を事例として—
服部 真紀 地域資源を生かした地域活性化
—静岡県富士市を事例として—
花房 祥太 スポーツを通した地域活性化
樋口 李菜 現代における郷土料理の可能性
—都留市の小学校における食育の取り組みを
事例に考える—
平田 恵理 地域で取り組む認知症支援の在り方
—福岡県大牟田市を事例に—

穂積 佑紀 豊かさとは 一日本人の長期休暇を利用した旅行を通じて考える—
松田 晃輔 外国人労働者の人権

地域経済論 両角 政彦ゼミ

赤松 奈々 滋賀県高島市針江地区におけるカバタの残存要因
雨宮浩太郎 甲州市原産地呼称ワイン認証制度を活かした地域ブランド化
—山梨県甲州市を事例に—
石山 惇大 地方都市における中心市街地の活性化とその課題 —山梨県甲府市を事例に—
遠藤 優美 「道の駅 富士川」における地域活性化の取り組みとその可能性
畠山 悠花 新興住宅地における居住環境の現状と課題 —山梨県上野原市コモアしおつを事例に—

都市環境設計論 前田 昭彦ゼミ

荒井 和樹 コンテンツツーリズムによる地域活性化 ～大河ドラマから見るコンテンツツーリズムの可能性と課題～
飯島 知也 島原湧水群から学ぶ湧水活用と課題
上西きり子 太平洋炭礦の持家制度について
片岡 孔 保育園や幼稚園などの子どもに関する施設での騒音問題 ～地域とのあり方～
顧 勘听 中国天津市伝統的建築物群五大道地域について —「五大道風貌区」の現状と発展

小林 亜衣 四日市場で行われている八朔祭の現状と課題 —地域の祭りへの関わり、地域住民考え方など—
馬場 美妃 富山ライトレールにおける住民生活の密着性と利用状況の関連性
若松 潤 佐賀県吉野ヶ里メガソーラー発電所を事例に太陽光発電の設置について考える

農山村再生論 福島 万紀ゼミ

伊藤ちひろ 市民農園利用者の食と農の意識変化に関する研究
楠葉絵里子 民間型アンテナショップがもたらす地域活性化効果の調査研究
—愛媛県のアンテナショップ二店の事例から—
滝口 誠 商店街の経営者に見られる意識の二極化 —都留市三町商店街を事例として—
谷田 花織 日本におけるロハスブームの展開が都市生活者の環境意識に与える影響について —ロハスフェスタを事例として—
千葉 歩 木材の新たな利用促進にむけた現状と課題
長谷川丈瑠 一次産業従事者による六次産業化への参入の課題と可能性
—新潟市フジタファーム sales を事例に—
正木 貴哉 体験型農村観光の多様化に関する研究
渡邊 知未 日本のソバ栽培の可能性
—幌加内町を事例に—

比較文化学科 平成27年度卒業論文題目

伊香 俊哉ゼミ

岩井つくし 植民地朝鮮・台湾における皇民化教育
貴船りさ子 日米開戦経緯 避戦の可能性はあったのか
田部井洋成 第一次世界大戦の開戦原因と各国の戦争目的
田村 友佳 虐殺・ジェノサイドの起こる背景と進行過程、社会の回復プロセス
富永 鈴枝 植民地統治下の台湾原住民

岩崎 正吾ゼミ

安曇紅美子 幼児教育における自然と子どもたちの関わり的重要性 —ドイツと日本の「森のようちえん」の比較を通して—
今福 真由 ドイツにおける英語教育 —実践的活用能力の育成を目指して—
金澤 萌 フィンランドと日本における出産・子育て・保育の社会支援 —日本が抱えている問題解決の糸口を探る—
北牧 彩 日本の幸福度 —OECD 幸福度調査から探る日本の幸福度—

舩香 了道 生きる力を育む学びの在り方について —デンマーク式教育から見た日本の教育—
小坂 千晶 地域振興策としての芸術祭 —アートプロジェクトの今と課題、アートがつなぐ地域の未来—
西田 知世 観光旅行から探る地方創生のあり方 —日本人とフランス人の観光旅行における価値志向の比較を通して—
本田 慧海 公教育における教育の世俗性原則に関する考察 —フランスにおけるスカーフ禁止論争に焦点を当てて—
宮城 一菜 義務教育段階における外国語教育の在り方 —フィンランドと日本における英語教育を中心に—

大辻千恵子ゼミ

赤羽 陽 コートジボワールにおける CAISTAB 下のカカオ産業の繁栄とその後 —構造調整計画はカカオ生産者を豊かにしたのか—

天野 拓 現代日本における「結婚」
—パートナーシップ制度導入を目指し—
猿田 真己 ゴスペルの女王 マヘリア・ジャクソン
—人種差別の時代を生き抜いた黒人女性—

岸 清香ゼミ

浅川 美由 「良妻賢母」という選択
—袴姿に象徴される近代女性の生き方—
五十嵐大樹 グローバリゼーションに「抵抗」する地域文化
—シュレンケラ・ラオホに見る個性の体現—
大谷 彩夏 「国際観光」の時代 —立山黒部アルペンルートにおける欧米的景観の創出—
久野 茜音 市民と協働の図書館づくり —横浜市立図書館はまかぜ号の可能性と限界—
倉田 桃子 偶像をめぐる生産と消費
—AKB48 グループにおいて演出／自演される「素人っぽさ」をめぐる—
鈴木真里亜 ストレス社会におけるヒーリング型リラクゼーション業
—その社会的機能をめぐって—
野村 斗萌 「シティボーイ」をつくる —雑誌『POPEYE』における冒険精神の提案—
花里 佳織 歴史を描く／戦争と向き合う
—従軍画家をめぐる戦後—
林 和 毎日書道展と奎星会
—「造形美」の追求から挫折へ—
矢作 広 ライフスタイルを横断するデザイン
—無印良品による「生活美学」の実現—

後藤 千織ゼミ

石井 亮 アメリカの“あやまった”外交、中東への
“あらためない”悪循環 WE are attacking
OUR freedom
生島 由理 ラマナ・マハルシと真我
岩松麻理奈 ディズニーの成功からみる戦略
—日本とアメリカの比較—
門脇 春菜 欧米における“JAPAN”の受容と表象
小島 直也 スポーツ、特にラグビーが人種融和に与える
影響と今後の展望
小林 美紀 中絶論争からみるアメリカの宗教社会
権守 佑紀 被害国、加害国から見るアジアの児童買春
抽那香奈子 黒人女性史とフェミニズム
沼沢 琴美 アメリカ合衆国の非合法移民
丸山 翔太 戦没者の遺骨問題を考え直す—沖繩を例に—
村松 光 スポーツにおけるセックスとジェンダー
—身体能力の性差は何に由来するのか？—

重富 恵子ゼミ

阿部 秀平 世界遺産保全の枠組みから見た富士山の環境
保全の状況
小松原千尋 古河機械金属株式会社の公害対策と企業の社会的責任
佐々木郁音 台湾原住民の狩猟文化の変化と政策
高橋 里依 カンボジアにおける前期中等教育

玉井 大輝 世界文化遺産保護と観光
宮崎 智美 在日ムスリムの葬送問題

高木 佑輔ゼミ

田中 萌花 東南アジアにおける日本軍政期と独立
—インドネシアの歴史観—
吉田 星南 シンガポールのナショナル・アイデンティティ
—言語政策を通して見えてきたもの—
戸高 仁 ドイツにおける移民政策の課題
—イスラム系移民を事例に—
大神田かれん 愛されない王様
—タイにおける不敬罪を事例として—
三上千亜紀 フィリピン人の定住と永住
—生活者となった東南アジア移民—
秋山 未来 ベトナムの宗教
—中国・インドからの影響と独自性—
石垣恵美梨 インドネシアの国語と地方語
—政治と宗教を通して考える—
平山 優 世界宗教と精霊信仰
—タイにおける仏教とビー信仰を事例として—

鳥居 明雄ゼミ

渡辺 真紀 日本庭園における日本美の意匠
篠田真悠香 遠山霜月祭りの研究
柳本 葉 現代に残る女人禁制
稲吉美祐喜 人間の善意
岩城 有咲 日本人の神観念
岩本 侑子 吉永八幡宮大名行列の伝統とこれから
菊池 絵里 空想動物の誕生と人々の価値観
黒木 珠紀 童謡と都市伝説
佐藤 柳介 ビラティス道を生きる
谷内 真麻 三浦哲郎作品論『忍ぶ川』
寺島 好美 日本における和菓子
堀内 佑紀 幾原邦彦監督作品から見る自己と社会の在り方
松尾 香澄 旧薩摩藩と日本神話の神々との関係性
吉岡 凌太 鯛からみる日本の食文化

邊 英浩ゼミ

嶋津 由美 幸福論
—今日「三大幸福論」から見えてくるもの—
鈴木 結花 共同社会の幸福を目指して
—日本における幸せとは何か—
申 東 爽 日韓飲酒文化比較考
—酒でつながる日韓関係—
梶原 彩加 韓国人の人間関係ネットワーク
—「契」から見えてくるもの—
中西由貴奈 アジアの宗教観と社会運動
—ビルマとカレン族の戦闘の歴史から—
林銀 志郎 日本サッカーの未来
—サッカーの歴史と現在から紐解く—
中島奈々子 気と理と通 —日本の気についての考察—
田丸 鈴愛 SF映画における人間の表象
—仮想未来が映し出す現代社会の行方—
笠原 宏輝 文化表出における集合的無意識
—日本社会の深層—

竹内 湧也 歴史上の人物に見るリーダーシップ
—普遍的なリーダーシップの資質—
今井 郁也 日本人の境界を越えて

分田 順子ゼミ

柄澤美有紀 日本における介護実習生の受け入れについての考察
内田 光 コーヒー生産者との関係から見たフェアトレード —スターバックスの「倫理的な調達」を事例として—
後藤 亜佑 多文化共生へのまちづくり
—群馬県大泉町の模索—
白井 瑛巳 「サンパビエ」の若者が直面する現状と課題
—パリ郊外の教育現場を中心に—
廣島 杏奈 日本における同性婚をめぐる動き
—制度化を求める声を中心に—
天野 盛介 社会問題解決におけるビジネスの可能性
—ヤマトグループのスワンベーカーを事例に—
井出あゆみ 外国人児童及び日本人児童双方にとって必要な多文化理解教育とは
—横浜市立 A 小学校の実践から学ぶ—
遅澤 星 自己選択／決定を求めるフランスのムスリム女性たち —スカーフ着用の多義性の考察—
川原安紀徳 日本の学校における LGBT 教育の現状と課題 —非当事者教員は当事者生徒にどう向き合えばよい—
島津 健 小学校における「日本型英語学習」の特質と課題 —日韓の比較を通して考える—
中井友梨乃 日本のパート、オランダのパート —暮らしと働き方の両立を求めて—

水野 光朗ゼミ

村尾 健一 安全保障に関する新聞論調の分析

海賀沙也佳 身体装飾が与える心理的影響
田口 瑞穂 女性装が持つ意味とそれに対する欲望の変遷
鈴木 航司 日本の ICT 産業と ICT 化が及ぼす影響
鈴木 和 近現代女性のボディイメージと社会変化の関連
塚原 和樹 国民に親しみをもたせるための自衛隊広報活動
岩見 有貴 アニメーション作品による地域活性化
山田 朝子 日本のプロレスリングの歴史とファン論
前川 海 屋台のにぎわいから都市観光を考える
金 経 済 日韓関係について

山本 芳美ゼミ

井上 雅大 『琉球処分』後の旧慣温存政策 —宮古・八重山における人頭税の歴史を中心に—
浅野 知美 着物から見る伝統文様の意味と継承
伊藤 温美 2000 年以降の集合住宅における孤独死対策 —その生成背景に着目して—
斎藤里菜子 現代日本における死生観の複雑化
佐藤 泉佳 日本人の肌色観—肌色とジェンダーの関係—
棚田 真由 はげ論
谷 紫苑 マネキンに見る日本女性の理想体型の変化
—戦後から現在まで—
徳田 侑佳 キラキラネームからみる『個性』という病理
富村 有希 現代沖縄人青年から見た近代沖縄差別
日高 苗 日本人と結婚式
—明治以降の変遷と現代の傾向—
前原 裕美 働く女性は幸せなのか —雑誌『日経 WOMAN』からみえる女性労働の変化—
茂手木美里 日本人と飲酒 —その歴史的検討—
守屋 李央 小津安二郎の思考的本質を探る —『風の中の牝鷄』と『東京暮色』を中心に—

文学専攻科 平成27年度研究論文題目

佐藤 隆 先生

古本菜津子 ネル・ノディングスの道德教育
—道德の教科化について—
初鹿 貴大 「小学校英語教育において求められるよりよい授業実践とは」
茂木 春菜 通常学級における特別支援を必要とする子どもたちへの関わり

筒井 潤子 先生

山下 陽子 被虐待児とその家族の理解と援助
—教師としてできること—

大学院文学研究科 平成27年度修士論文題目

国文学専攻

阿毛 久芳 先生

裴岩 亜紀 安房直子初期童話研究

牛山 恵 先生

伊藤 貴彦 第5次改訂以後の学習指導要領下における国語教育の展開

篠原 結実 中学校国語科における言語感覚の育成
—季節「秋」を表す言葉に関わって—

社会学地域社会研究専攻

黒崎 剛 先生

浅井 優 種子の知的財産化 —非意図的な特許侵害から考える農民に与える影響と問題点—

沖野 敬祐 現代日本のサブカルチャーにおける「少年」と「ロボット」 —日本アニメ文化社会史、物語分析、表現技術論の三層構造分析—

渡邊 里穂 普遍的な歴史は語りうるか
—1990年代の歴史認識論争—

野畑真理子 先生

郭 聡 中国企業における女性の就業継続の歴史とその変容

横田 力 先生

秋山 直紀 現代貧困論の憲法原理的考察 —社会保障制度改革国民会議報告書の批判的検討をふまえ、新たな生存権論の確立を目指して—

幾田 遼 公共圏論の日本憲法学における受容と個人像の変容

櫻田 千絵 日本国憲法と平和主義 —今日の平和主義をめぐる憲法状況を手掛かりに、戦後日本の想像する平和とその人間像を問う—

矢崎 健也 今日における教育権論の課題

英語英米文学専攻

儀部 直樹 先生

園部 敬祐 The importance of awareness
Consideration of Whitman's life and poetry

竹島 達也 先生

有井 一博 The Transition of Americanism on the Wars:
Through American War Plays

中地 幸 先生

地下友梨奈 Colonial Kenya and Kenyan Identity:
A study of Ngugi wa Thion'o's Works

鷺 直仁 先生

稲垣 静姫 The Essence of Work by Ford Madox Brown

比較文化専攻

大辻千恵子 先生

塚田 悠 人種「偏見」・「嫌悪」を問う —アメリカにおける「青い目・茶色い目」実験を手がかりにして—

山本 芳美 先生

菊池 有紗 日本人の洋舞に対する認識の変遷
—フラメンコの受容から協会の設立まで—
藤井 涼花 うわさと差別
—日本のエイズパニックを事例として—

臨床教育実践学専攻

鶴田 清司 先生

崎田 香穂 演劇づくりを通じた人々のからだの変化を捉える —教育的意義を見いだしながら—

講演会だより

平成 27 年度 国語国文学会秋季講演会

『近代化と文化的記憶の変容

——明治文学における人魚表象と
ヨーロッパ世紀末芸術』2015年11月18日(水)開催
講演者 平石典子先生

講演会の様子

私たちは、人魚というと、ディズニー映画の『リトルマーメイド』に代表されるような〈下半身が魚で上半身が人間の女性〉のイメージを思い浮かべます。そして現在、それ以外のイメージで人魚を想像するのはなかなか難しいことです。ですが、この人魚のイメージは果してそれほど自明なものなのでしょう。この人魚のイメージの自明性を一たび疑ってみると一体何が見えてくるのでしょうか。今回、講師にお招きしました平石典子先生は、このようなテーマで、人魚にまつわる文学・文化についての非常に興味深いお話をしてくださいました。以下、ご講演の内容のあらましをご紹介します。

日本において、人魚的な存在についての記述は『日本書紀』

の時点ですで見つけることができますが、「人魚」という名称が使われ始めたのは 10 世紀頃、以降、「人魚」は、それを食べた人間が八百年の長寿を全うしたという八百比丘尼伝説を中心にして、長寿の薬、即ち食用の〈魚〉として捉えられていました。江戸期から明治初期にかけて、そのような捉え方がなされてきましたが、その〈魚〉としての人魚のイメージの転換点となったのが明治 40 年、この年、「大なる乳房を有ち尾鰭の上下に開けたる」人魚の剥製が浅草珍世界に出品されたという新聞記事が現れ、詩人の蒲原有明も、「真白」な「胸乳」を持つ〈人間の女性〉としての人魚のイメージを歌い上げます。そして、この〈人間の女性〉としての人魚のイメージは、同年

の北原白秋の詩「紅玉」や、翌年の夏目漱石の『三四郎』においても立ち現われ、やがて妖しく美しい身体性を獲得してゆくようになります。この新しい流れは、およそ 10 年後の大正 6 年発表の谷崎潤一郎の『人魚の嘆き』において絶頂を迎えることとなりました。この新しい人魚のイメージを日本にもたらしたのは何か。そのものこそ、妖艶な美で男を惑わす「宿命の女」を描いたヨーロッパ文学・芸術であったわけです。

平石先生のお話を拝聴しながら、そもそも人魚がサンショウウオなどと並列されてグロテスクな〈人面魚〉として描かれていた事実にはまずは驚き、今や失われてしまった〈魚としての人魚〉の「文化的記憶」の欠片のひとつひとつを面白く思いました。そしてそれが『『美』の絶頂』（谷崎『人魚の嘆き』）と形容されるほど官能的で魅惑的な〈魚の下半身を持つ人間の女性〉にまで変質・変容した事実、わが国が受けた〈西洋の衝撃〉の大きさの証左を改めて見る思いがしました。知的な昂奮を覚えた、非常に充実したひとときでした。

（国文学科 講師 菊池有希）

講師紹介



平石 典子（ひらいし のりこ）

1967 年、北海道生まれ。東京大学大学院超域文化科学専攻単位取得退学。博士（学術）。専門は比較文学（ヨーロッパ世紀末文学、日本近・現代文学）。現在、筑波大学人文社会系准教授。『煩悶青年と女学生の文学誌—「西洋」を読み替えて』（新曜社、2012 年）で第 12 回島田謹二記念学芸賞、第 18 回日本比較文学会賞を受賞。

講演会だより

平成 27 年度 英文学科・英文学会共催後期講演会

『国際的に通用する
プレゼンテーションの技法』2015年11月24日(火)開催
講演者 萱 忠義先生

今回の講演会にて、萱先生は「国際的に通用するプレゼンテーションの技法」と題し、プレゼンテーションを通して自分の考え、アイデアを相手に伝える為に重要な事柄を紹介してくださった。

先生は、プレゼンテーションを通して自分の考えをわかってもらうには、読み上げるのではなく、語り掛ける(talk to the audience)ことが重要だと述べ、7つの事柄と兼ね合わせて、論理的に話を構築することが重要であると主張された。7つの事柄というのは、「話すとき、日本人の頭で話して相手に伝わるのか?」「どうやってまとめて伝えるか」「目を合わせ

て話す」「ジェスチャーをするのはなぜ、どうやって」「声の変化(棒読みでなくするには)」「プレゼン用のスライドの作り方」「ハンドアウトの作り方」の7つである。

プレゼンテーションはコミュニケーションの一つと言える。普段、人と会話する時と同様、アイコンタクトやジェスチャー、声のトーン、声量を活用することが、プレゼンテーションを行う上でも必要であるとお話ししてくださった。より多くの人々に自分のプレゼンテーションを理解してもらうには、メインアイデアに客観性を入れ、結論を明確にすることが重要である。日本における起承転結、

或いは婉曲的な言い回しという表現は、多言語を話す人々にとっては理解しがたいのだと萱先生は説明された。また、見やすいスライドやハンドアウト作りにも言及され、スライドのデザインや見やすいフォントなどの具体的な例を示してくださった。先生は、御自身で指導されている他大学の生徒のプレゼンテーションが上の7つの事柄を取り入れたトレーニングを経て大きく向上した事を、映像を用いてトレーニングの有効性を説明してくださった。

萱先生のプレゼンテーションの様に、分かりやすいプレゼンテーションを私もできるようにになりたい。しかし、具体的にどのように技術を向上させるかは独りで考えても簡単には分からない。コンピュータを用いてプレゼンテーションを行うことは、近年になり盛んになってきたうえ、これからの発展も望める。今回の講演会は、プレゼンテーションに重要な具体的な技法を教わりながら、人へ語り掛けるプレゼンテーションをじっくりと考える大変良い機会になったと思う。

(英文学科1年 井上 凱)

講師紹介



萱 忠義 (かや ただよし)

1972年9月2日東京都立川市生まれ。北アリゾナ大学出身。北アリゾナ大学応用言語学博士課程修了、博士号(Ph.D.)取得。海外の大学や留学で養った経験を基に、現在はプレゼンテーションの技法等、様々な分野で活躍している。

最近の著書:

『TOEFL テストフレーズで覚える英単語』(学研教育出版:2014年)

『はじめて受ける TOEFL テスト パーフェクト英単語』(桐原出版:2015年)

講演会だより

平成 27 年度 比較文化学会主催講演会

『絵画から読み取る当時の生活』

2015年12月4日(金)開催
講演者 中野京子氏

12月4日(金)、16時30分から、2号館2101教室において、ベストセラー「怖い絵シリーズ」などで知られる作家・ドイツ文学者の中野京子氏をお呼びして、都留文科大学比較文化学会主催講演会「中野京子氏講演会、絵画から読み取る当時の生活」を開催しました。英文学科の加藤めぐみ准教授に同時限の授業である「イギリス文化と社会Ⅰ」の大教室を提供していただき、授業の一環として参加した英文学科の学生、比較文化学科の学生、他学科や一般の来場者合わせて200名近くの来場者が、中野氏のお話に耳を傾けました。興味深く、時にはユーモアを交えての講演は、会場をしばしば沸かせました。西洋の歴史や芸術に関するエッセ

イを多数発表し、テレビの美術番組にも出演するなど活躍されている中野氏の講演とあって、聴衆の中には、中高生の時から中野氏のファンだという学生が何人もいました。

講演中に取り上げた作品は、シャルダン「食前の祈り」(1740、フランス)、ルノワール「シャルパンティエ夫人と子供たち」(1878、フランス)、レーピン「ヴォルガの船曳き」(1870、ロシア)、ミレー「落穂ひろい」(1857、フランス)、ホルバイン「ヘンリー8世」(1537、イギリス)、ブリューゲル「農民の踊り」(1568、オランダ)の6作品でした。中野先生からは、王や富裕層を描いた美しい絵画、農民の生活を題材とした素朴な絵画を通して、

歴史や当時の事情に関するわかりやすい解説がありました。翌日はテレビ番組『世界一受けたい授業』の収録の予定もあるというご事情もあり、作品解説は90分の講演時間では行き届かないのは必定で、「もっと聞きたかった」という声が多く上がりました。

作品解説では、たとえば、レーピンの「ヴォルガの船曳き」では当時のロシアが他国より産業的に遅れていたことを、他国の船とロシアの船を同じ絵の中に描くことで暗示していたそうです。ホルバインの「ヘンリー8世」では、当時の男性はコドピースと呼ばれるものを股間に装着し、短いズボンを履き、白いタイツを履き、脚線美を強調させていました。滑稽とすら思える姿ですが、一方で女性が足を見せることははしたないとされ、足首より短いスカートを履くことすら許されていませんでした。

このように、美術を通して、さまざまな時代、身分の人々の行動や服装の差について考えることは、比較文化学科をはじめとする学生たちにとっても参考となったと思います。

最後になりましたが、講演企画者として、忙しい中に大学においていただいた中野京子さん、私たち学会事務局員に協力して下さった、山本芳美教授、山本ゼミの皆さん、職員の方々、来場者に深くお礼申し上げます。

(比較文化学科2年 笹井加奈子)

講師紹介



中野 京子 (なかの きょうこ)

作家・ドイツ文学者。

最新著書に『残酷な王と悲しみの王妃2』(集英社)、『絶筆で人間を読む』(NHK出版)、他に『怖い絵』シリーズ(角川書店)、『中野京子と読み解く 名画の謎』シリーズ(文芸春秋)など、連載に「名画が語る西洋史」(文芸春秋)、「橋をめぐる物語」(北海道新聞、東京新聞)、「マリー・アントワネット」(「NHKテレビテキスト テレビでフランス語」)、「絵の中のモノ語り」(集英社「エクラ」)など。

ブログ「花つむひとの部屋」

<http://blog.goo.ne.jp/hanatumi2006>

講演会だより

ジェンダー研究プログラム主催講演会

『日本の会社で女性の活躍はなぜ難しいのか
～「育休世代のジレンマ」～』

2016年1月20日(水)開催

講演者 中野円佳氏



講演会の様子

2016年1月20日、ジェンダー研究プログラム主催の講演会「日本の会社で女性の活躍はなぜ難しいのか～「育休世代のジレンマ」～」が開催されました。お話して下さったのは、研究者でジャーナリストの中野円佳さん。中野さんは、東京大学教育学部を卒業して日本経済新聞社に入社、育休中に立命館大学大学院で上野千鶴子氏のもとに学び、修士論文をもとに『「育休世代」のジレンマ』を出版されています。現在は転職し、企業変革パートナー「チェンジウェーブ」に参画しつつ、東京大学大学院博士課程に在籍されているそうですが、今回の講演では御著書をもとにしたお話をしてくださいまし

た。

日本で、管理職に占める女性の比率が極めて低いのはなぜか。日本の会社で女性が活躍することはなぜ難しいのか。中野氏はこの問題について考えるべく、「育休世代」—2000年前後の法改正などを経て女性総合職が増え、育休を取るのが「当たり前」になってから就職した世代を氏はこう呼んでいます—の女性たちのなかでも社会的にはいわば「勝ち組」といえる、大手企業に就職し結婚し出産した女性たちを主な対象として調査をし、その結果を本にまとめられたのですが、講演会ではその内容を図など駆使しながら分かりやすく説明してくださいました。結論としては、やはり日本社会が

長時間労働を前提として成り立っていること（加えての転勤）に根本的な原因があり、育児中でも仕事が継続できるよう制度としては整ったとはいえ、女性たちは定時に帰らなければならないという理由で今までと違う仕事に回されやりがいを失ってゆく、また成長の機会を得られなくなるという状況にあることを示されました。さらに今日においては、育児の重要性が唱えられつつも、いまだ専業主婦前提の社会の制度は残り、母として受けるプレッシャー・仕事と育児の両立のハードルは昔より高まっているとも分析されています。社会において責任ある立場にたとうとする女性が直面するさまざまな困難を浮き上がらせてくださり、今自分が暮らす日本社会の構造的な問題を考える貴重な機会となりました。学生たちからの熱心な質問にも丁寧に答えくださり、女性が力を発揮できる社会について、真摯に考え続けていらっしゃる姿が印象的でした。中野先生、どうもありがとうございました。

(国文学科 准教授 長瀬由美)

講師紹介



中野 円佳 (なかの まどか)

2007年、東京大学教育学部卒、日本経済新聞社入社。

2014年、育休中に立命館大学大学院先端総合学術研究科に提出した修士論文を『「育休世代」のジレンマ』として出版。育休復帰後に働き方、女性活躍推進、ダイバーシティなどの取材を経て、2015年4月より企業変革パートナーのチェンジウェーブに参画。東京大学大学院博士課程に在籍。

文大だより

卒業演奏会を終えて



卒業演奏会を終えて うぐいすホールにて

私たち音楽専攻生にとって、大学生活を締めくくる集大成である卒業演奏会を、無事に終えることができました。うぐいすホールという、素晴らしいステージで卒業演奏会を迎えるにあたって、多くの方々に支えられ演奏ができたことに感謝しています。

私たちは一年生の頃から毎年、うぐいすホールで演奏をする四年生の姿を見続けてきました。うぐいすホールでの先輩方の堂々とした姿、迫力のある演奏、すべてが

憧れで、「私も四年生になったらあんな素敵な人になりたい。」と自然に思うようになりました。

四年生になり、「まだまだ先だ」と思っていた卒業演奏会が近づいてくるにつれ、演奏のことばかり考え、思うように演奏ができない悔しさ、情けなさに苛まれる日々が続きました。大きな舞台上、一人きりで演奏するということが大きな喜びであることと同時に、決して失敗ができないというプレッシャーもあったからです。「練習は日々紙を積み重ねていくようなもの。一夜漬けでできるようになるようなことはない。」日々私たちはそのことを胸に練習に励んでいました。音楽棟に足を運ぶと、一緒に演奏会を創り上げる仲間の演奏が廊下から聞こえ、刺激され、練習により力が入り、モチベーションがどんどん上がっていったのが身に染みてわかってきました。

卒業演奏会当日は、緊張と落ち着きが交錯し、自分がどんな精神状態だったのか、今思い出そうと思っても思い出せないくらい一瞬でした。私は、憧れの舞台に一人で立ち、四年間の努力、思いを発揮し、演奏をすることができる場があることに幸せを感じることができました。専攻生18人全員で演奏会を無事成功させることができ、大変嬉しく思っています。

一年生の頃から向き合ってきたピアノですが、時には逃げ出したくなることもありました。しかし、それでも卒業演奏会を迎えることができたのは、熱心にご指導してくださった先生方、家族、友人、後輩のみなさん、卒業された先輩方、サポートしてくださったみなさまの支えがあったことだと強く感じ、感謝の気持ちでいっぱいです。私たち音楽専攻生は、音楽を通して、かけがえのないものを得ることができました。これから先、どんな困難なことが待ち受けていても、ここで学んだことを生かしていきたいと考えています。本当にありがとうございました。

(初等教育学科音楽専攻4年 久保 遥)

文大だより

卒業制作展を終えて
— 発見と楽しむこと —

私は、芸術・体育系及び自然環境科学系推薦の図工・美術を受験し、本学に入学しました。その後、2年生から図工・美術専攻に所属し、図画工作について学びながら制作してきました。

教育実習では4年生を担当し、子どもたちに図画工作の指導をするなかで、改めて子どもたちから様々な発見をしたり、制作を楽しんだりすることの大切さを学びました。

私にとって絵を描くことは、自己表現の手段であり心の支えです。私は人見知りで、自分を言葉で表現することは苦手ですが、絵の中では言葉にできない自分自身の感動や、想いを自由に表現し、外に発信することができます。

この1年間、卒業制作展「Vif」（鮮やか、活発の意）に向けて制作してきました。その間、卒業論文、就活、アルバイト、サークル活動など、様々なことに追われ、すべての時間を制作に費やすことはできなかったように思います。しかし、筆を握らない日はありませんでした。何度も迷い、苦しみながら制作してきました。その度に先生方に助言して頂き、また両親にも励まされました。私の人生において最も真剣に表現活動と向き合った時間であったと思います。

制作の中では、子どもたちから学んだように、様々な発見をしたり楽しんだりすることを心がけました。その結果、「描く」だけでなく、「削る」「盛り上げる」という新しい技法の発見や、「横長の画面」と「物語的展開」をもつ絵巻物制作など、自己表現の可能性を広げることができたと思います。

私と同じように図工・美術専攻4年生全員、精一杯制作しました。卒業制作展の搬入・展示作業では、丹精を込めて制作した作品を会場に飾ったとき、美術研究棟では感じたことのない雰囲気を感じました。同じ絵の具を使っている制作者ごとに色の雰囲気が異なったり隣同士の作品のよさが響きあったりして、会場自体が大きな一つの作品空間として感じられました。会期中、地域の方をはじめ大学関係者、両親など多くの方々に作品を見ていただき、「観にきてよかった」という言葉を聞くことができました。

指導してくださった先生方、準備を手伝ってくれた後輩達、切磋琢磨しながら支え合ってきた仲間、全てが一つになって卒業制作展を成功させることができたと思います。

最後に、お忙しいなか本展覧会にご来場いただいた方々、お世話になった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



制作の様子（筆者）

（初等教育学科4年 堤 美咲）

文大だより

NHK 大学セミナー

『夢を叶えるために』

～オリンピック銅メダルまでの道のりから～』

2015年12月9日(水)開催

講演者 朝原宣治氏



会場の様子

12月9日(水)に、朝原宣治さんを講師にお迎えし、NHK 大学セミナーを「夢を叶えるために～オリンピック銅メダルまでの道のりから～」という題目で行いました。朝原さんは、2008年に行われた北京オリンピックの男子4×100mリレーでアンカーを務められ、見事オリンピックで銅メダルを獲得されています。そのような素晴らしい選手がこの都留文科大学で講演をしてくださると聞いた時は、私自身が陸上競技を続けていることもあり、本当に嬉しく思い、どんなお話をしてくださるのか楽しみでした。

講演会は、まず「ようこそ先輩」という朝原さんが特集されている番組を見ることから始まりました。番組内容は、朝原さんが母校の小学生にリレーを教えるという内容でした。その中には、朝原さんが北京オリンピックでの自分の心境を涙ながらに話す場面もありました。また、子どもたちのやる気を引き出させる声かけがとても上手だと思いました。

番組を見終わると、都留文科大学陸上競技部監督の麻場一徳先生が質問をし、それに朝原さんが答えていく形になりました。その中で一番印象に残っているのは、北京オリンピックで銅メダルを獲得したレースではどのような気持ちでバトンを待っていたかという質問に対し、ただ目で追いかけるだけで、あまり感情移入せず冷静だったと答えていたことです。オリンピックの決勝という胸が張り裂けそうな大舞台で冷静に待てられることは、36歳まで現役で陸上競技を続け、銅メダルを獲得できた理由のひとつであり、朝原さんの強さであるのだろうと感じました。

最後に朝原さんへの質問をいくつか受け付けたところ、質問できない人もいるくらいたくさんの人が手を挙げていました。質問した学生の中には朝原さんの大ファンだという人もいました。

テレビで見ていた朝原さんを、実際に生で見たのは初めてでしたが、落ち着いた雰囲気のある方だと感じました。試合での冷静さは普段の朝原さんの人柄が出ているのではないのでしょうか。今回の朝原さんの講演会は、陸上競技をやっている人に限らず、自分自身を見直すきっかけとなった人は多いはずです。

最後に、都留に来て講演をくださった朝原宣治さんと、講演会を開くにあたりご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

(初等教育学科3年 桑原美月)

講師紹介



朝原 宣治 (あさはら のぶはる)

アトランタ・シドニー・アテネ・北京の4大会連続でオリンピックに出場。北京では4×100mリレーでアンカーを務め、銅メダル獲得に貢献した。その他にも、世界陸上に6回出場し、100mの日本記録を3度更新するなど、長きに渡り、日本陸上短距離界のエースとして活躍した。2008年に現役を引退して以降は、『NOBY TRACK and FIELD CLUB』を旗揚げし、ジュニアやユース世代の選手育成に精力的に取り組んでいる。

文大だより

第11回地域交流研究フォーラム

地域交流研究活動—SAT活動をふり返って—

12月12日(土) 2号館1階2102教室で「第11回地域交流研究フォーラム 地域交流研究活動—SAT活動をふり返って—」が開催されました。

SAT活動は平成17年度より地域交流研究センターの事業の一つとして始まりましたが、平成26年度の教職支援センター設置に伴い、平成28年度より全ての活動が地域交流研究センターから教職支援センターへ移管されます。

本フォーラムは、これまでのSAT活動をふり返りつつ改めてその概念と意義について確認するとともに、地域交流研究センターと移管先である教職支援センター関係者が、これまでの成果を共有し、今後の可能性を探るものでした。

こういった経緯を踏まえ、当日はSAT創設黎明期の様子や当初の理念、経緯について佐藤隆先生(初等教育学科教授)と杉本光司先生(元地域交流研究センター長)から、また勝俣武男先生(元東桂中学校長・元キャリアサポートセンター教員アドバイザー)より当時のエピソードなどを、亀田孝夫先生(教職支援センター特任講師)からは「教職実践演習におけるSATの現状」についてご報告いただきました。これを受け、ご参加いただいた受け入れ校の先生方からご発言いただき、また宮下聡先生と山崎隆夫先生(ともに教職支援センター特任教授)も、教職支援センターを代表し、感想などを述べられました。

多くの関係者の皆様の参加により、大変意義深い会であったと思います。

地域交流研究センター長 鳥原正敏



合唱団第50回記念定期演奏会

平成27年12月13日、都の杜うぐいすホール大ホールにて、第50回都留文科大学合唱団記念定期演奏会を開催致しました。

毎年「世界合唱の日」と定められた12月の第二週の日曜日に定期演奏会を開催しておりますが、今年度は記念すべき50回目ということで、合唱団の創立者であり、本学名誉教授であります近藤幹雄先生に御指導いただき、また、プロとして御活躍されています弦楽奏者の皆様、ソリストの皆様をお迎え致しました。約60名のOBOGの皆様とご一緒に伝統ある「メサイア」を合唱し、共にステージを創りあげることができました。中には第一回目の演奏会に参加されていた方もおられ、改めて当団の伝統と歴史を引き継ぐことの重大さを実感致しました。

演奏会当日は予想を遥かに上回るたくさんの地域の皆様に御来場いただき、満席となりました。節目



うぐいすホール大ホールにて 当日本番の様子

の年に相応しい、華やかな演奏会となり、大盛況の内に無事終わることができました。たくさんの御支援、御声援をありがとうございました。今後とも都留文科大学合唱団を温かく見守ってくださいますよう、よろしくお願い致します。

都留文科大学合唱団 平成27年度団長
比較文化学科3年 山本朋枝

遊学奨励金交付式

去る 2 月 1 日（月）学長室において遊学奨励金交付式が行われました。

遊学奨励金は、主体性、積極性、語学力、コミュニケーション能力、異文化理解等を身に付けて様々な分野で活躍できる人材を育成するため、国外で一定期間の活動を行う学生に交付するため、平成 26 年度に設立されました。

今回、平成 27 年度後期の応募者の中から、奨学金審査委員会が、特に計画に主体性、積極性が認められ、学力及び人物が優秀で、向学心堅固な者として、英文学科 3 年の学生を選考し、上限額の 50 万円が給付されました。

上限額の給付は本制度設立以来、初めてのことです。

交付式では、福田学長からお祝いの言葉をいただき、目録が手渡されました。



遊学奨励金交付式の様子

子ども公開講座

本学地域交流研究センターでは、市内の学童保育の子どもたちをおもな対象とした「子ども公開講座」を、毎年夏休み（7・8 月）・冬休み（12・1 月）の期間中を主として開催しています。これは、都留市教育委員会の「子どもの居場所づくり事業」への協力の一環として、平成 24 年度から教育委員会との共催で行っているものです。

本年度は、昨年に引き続いて開催の「Hello! 英語でワクワク!」、「楽しく走ろう! Run, Run, ラン!」、「留学生と遊ぼう!」、「ムササビに会いに行こう!」、「読書の楽しさを知る」と、本年度から新しく始めた「富士山の中の水の旅」の、計 6 講座を開催いたしました。

日 時	講 座 名	会 場	講師・指導	参加人数
8 月 7 日（金）	Hello! 英語でワクワク!	大学 3 号館ホール	奥脇奈津美 （英文学科准教授）	25 名
8 月 10 日（月）	楽しく走ろう! Run, Run, ラン!	やまびこ競技場	麻場一徳 （初等教育学科教授）	29 名
8 月 12 日（水）	留学生とあそぼう!	大学 3 号館ホール	小林文子 （留学・国際交流室専門員）	24 名
8 月 23 日（日）	富士山の中の水の旅	山梨県立 富士山科学研究所	内山美恵子 （COC 推進機構特任教授）	17 名
12 月 5 日（土）	ムササビに会いに行こう!	大学自然科学棟・ 今宮神社	北垣憲仁 （COC 推進機構特任教授）	15 名
1 月 5 日（火）	読書の楽しさを知る	大学附属図書館	日向良和 （情報センター准教授）	30 名

編集後記

大学教育と
Wikipedia

日向良和

一般的に大学教育において「Wikipedia」は忌避されるキーワードである。例えば、レポートに「Wikipedia」を使用すると、そのレポートは不可となるか、大幅な減点となる。Wikipediaは誰でも、いつでも内容を編集でき、その内容をWikipediaは保証しないため、執筆者・編集者による正確性や、後日の検証におけるリンクなどが通常保証されず、不明確な情報源として教育される例が多い。

本年度、学芸員資格科目の一つ「博物館情報・メディア論」において、このWikipediaを活用した講義をおこなった。「博物館情報・メディア論」は博物館サービスにおいて使われるICTを学ぶ講義である。

「Wikipediaタウン」というイベントが、昨年度より日本の各地（横浜、富山、京都等）や国会図書館関西館などでもおこなわれている。Wikipediaタウンはある地域について、参加者自身が図書館・博物館にて情報を探索し、ICTを活用して編集するというイベントである。参加者は地域情報に触れると同時に、正確な情報の探索、文章の編集、ICTの操作などを習得することができる。博物館・図書館においても、あまり知られていない地域資料を住民に示すことができ、地域再発見、地域アイデンティティの確立に資することが期待される。講義では「Wikipediaタウン in 都留」と題して、都留市に関する地域情報を現地や市立図書館にて集め、Wikipedia記事を編集し公開した。学生や市民の方が楽しみながら都留市について学び、その学んだ成果を世界に発信することができ、さらに図書館の「地域資料」があり、その特徴を学ぶこともできた講義となった。

Wikipediaを大学教育に応用した例としては、これ以外にも、英語教育において、日本語記事を英訳したり、英語記事を翻訳したりするという実践が、東京大学にておこなわれている。筆者も学生も、Wikipediaを日常的に見ている。そのWikipediaをうまく活用することで、学生の学習への興味を引き立てつつ、教育効果を上げ、さらに地域情報の発信ともなることが確認できた講義であった。

国際バカロレアとこれからの
大学入試改革

— 知を創造するアクティブ・
ラーニング —

福田 誠治 著
2015年12月発行

亜紀書房 2,000円＋税
◇ふくた せいじ
都留文科大学学長

日本映画の海外進出

— 文化戦略の歴史 —

志村三代子 他／著
2015年12月発行

森話社 4,600円＋税
◇しむら みよこ
比較文化学科准教授



本 ぶんだい堂



先生、NPOって儲かりますか？

～若者たちが地元で
賢く生きる方法～

渡辺 豊博 著
2016年1月発行

春風社 1,500円＋税
◇わたなべ とよひろ
社会学科教授

インド英語文学研究

— 「印パ分離独立文学」と女性 —

大平 栄子 著
2015年12月発行

彩流社 4,500円＋税
◇おおひら えいこ
英文学科教授

